
偽・竹取物語

白山菊理

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

偽・竹取物語

【Nコード】

N7938D

【作者名】

白山菊理

【あらすじ】

日本最古の物語「竹取物語」をベースにしたギャグ小説です。

かくや姫の誕生？

今となつては昔の事ですけど、ある所に竹取の翁というものが居ました。翁とはお爺さんという意味で決して名前じゃありません。

名はさぬきの造^{みやこ}。その名の通り讃岐うどんが大好きで、根っからのうどん派でした。

お爺さんは蕎麦派のお婆さんと良く喧嘩をします。

この日も蕎麦対うどんで喧嘩をして、家から飛び出していつもの竹やぶに来ていました。

お爺さんの仕事は竹を取って、様々な事に使ったり何か作ったりすることでしたので、この竹やぶは材料収集場所なのです。もちろん、竹だけではなく竹の子を取っていたことも否定はしません。

お爺さんは婆さんとの喧嘩の憂さ晴らしをしつつ竹を切っていると竹の中に根元が光る竹が一本ありました。

もしかして、黄金の竹？これはお金持ちになれるぞ！しめしめ…

…

と、何ともいやらしい考えといやらしい顔で竹を切ると……

「痛いっ！痛いっ！首、首落ちるし。危機一髪！生まれてきてすぐに九死に一生だし！」

と竹の中から喚き声が聞こえてきました。

不思議に思つて竹に近寄つてまじまじと見てみると、三寸くらいの可愛らしいけど、どこか小憎たらしい女の子が座っていました。

お爺さんは言いました。

「ちっ…黄金じゃ無かつたよ。まあ、良い。私が毎朝毎晩見る竹の

中にいるので分かった。きっと私の子になるはずの人なんだ。きつと、そうだ。」

「はっ？ 訳わかんないし。何で？ 何でそういう結論になるの？」

「さあ、私の家へ！」

「話聞けよ！！！」

こんなわけで、お爺さんは手に乗せて小さな女の子を家にテイクアウト…いえ、持ち帰りました。

そして、お爺さんへの嫌がらせに夕飯を蕎麦にしているお婆さんに女の子を見せ、経緯を話し、育てる事にしました。

お婆さんは大層喜び、お爺さんにうどんを茹でてあげる事にしました。

不機嫌なお婆さんを上機嫌にしまうほど、この女の子は可愛らしかったのです。

と、ここで女の子が

「私、中華そば派だから。ラーメンだから。」

やっぱり可愛いのは外見だけです。

すすく育つかぐや姫

さて、この女の子を見つけてからというものお爺さんは竹やぶで望みどおり黄金の入っている竹を見つけるようになりました。

お爺さんは段々と裕福になり、お婆さんに「誰のおかげで飯が食えとるんじゃい。うどんにしろ、うどんに」と、うどんを強制的に作らせるようになる立場になり、見事甲斐性無しから抜け出すことに成功しました。

女の子はというと、養育するうちに、すすくという可愛らしい言葉は似合わないほど凄まじい早さで成長し、3ヶ月で人並みの背丈になりました。さすが竹から生まれた竹の子です。

お爺さんとお婆さんは、このあまりに早すぎる成長をあまり気にも留めず、普通の子と同じ様に、髪結いの儀式や裳を着せたりして、帳台の中から一步も出さずに、ヒッキーな感じに育て上げました。おかげで、生まれたときから少し我儘でしたが、ますます我儘になつていきました。

「あのさー、おやつにプリン食べたいんだけど。」

「これこれ、おやつはここに大福があるじゃろう。」

「プリン、絶対にプリン!!」

「仕方ない、買ってきてやろう。」

「100円で3つ入りとか嫌だからね!」

と、こんな具合に。

それでも可愛い女の子のためですから、甘やかし続けました。俗に言う猫可愛がりです。

しかし、こんな性格ブスになりつつある彼女ですが、外見の美しさといったら比類がないくらいで、家の中も彼女がいるだけで暗いところがなく、光に満ちています。

美しいのは外見だけです、それでもお爺さんもお婆さんも、苦しいことや辛いことがあっても、この子をみると慰められるのでした。たまに、この子の性格にイラッとくることもありましたが、外見によって誤魔化されていました。

こうして、この間にも黄金の入った竹を取り続け、お爺さん達は財力の大きい、いわば大富豪になっていきました。

女の子はさらに成長し、背丈が大きくなったので、お爺さんとお婆さんはここでようやく女の子に名前を付けることにしました。いくらなんでも遅すぎです。

三室戸斎部の秋田というどっかのおっさん呼びつけて名前を付けてくれるように頼みました。

すると、秋田は

「竹から生まれたんやろ？竹子とかじゃだめなん？あ、駄目ですか。ほんなら、“なよたけのかぐや姫”っていうのはどうやろ？うん、うん。あ、OKですか？じゃあ料金の方なんですけども……」

と、いたって簡単に名前をつけました。

『なよたけ』とは『弱竹』と書いて、若い竹を意味する言葉です。どうしても秋田は「竹」にこだわっていたようですが、以後ずっとかぐや姫と呼ばれるので竹という字をつけても目立ちませんでした。

虚しいですね。

まあ無事に名前も付き、おめでたいということで3日間酒盛りをして楽しんだそうです。

詩歌や舞などを催し、男という男は誰構わず呼びつけ、まさに逆ハイレム状態のかぐや姫。

かぐや姫の美しさに男達は虜になって、なんでも言うことを聞くのかぐや姫は益々付け上がります。

将来がかなり不安です。

「ところで婆さんや。そんなに厚化粧してどうしたんじゃ？」

「だって、女の人は一人居ないのにあの子ばかり目立ってるから私も若い頃にもどってみようと思って。うふふっ（ウインク）」

「おええええええ！！」

どうか私の嫁になって下さい！（一）

世間の男性達は、身分など関係なく、皆かぐや姫を手に入れたい、妻にしたいと思うようになりました。

中には噂に聞いただけに恋い慕い、思い悩むロマンチストな妄想壁さんも居るくらいです。

皆さん、かぐや姫の我儘ぶりを知らないので完璧に騙されています。もう男どもは我慢しきれなくなりましてね、夜な夜な出掛けてはお爺さん宅に居るかぐや姫を一目見ようと、闇夜に穴を抉り、覗き込むほど夢中になっていきました。

この頃から女に求婚することを「よばひ」と言っただとか何とか役に立つ様な立たない様な無駄知識ですけども。

家の周りをくるくる回って、人の気配が無いようなところも覗いて見たりしますが、やっぱり何の成果も出せず。

はたまた、家の人たちに言付けようとしても

「またですか。いい加減にしないと警察呼びますよ？いいですか、貴方のやってることはストーカー行為と大差ないんですから！てかそのものです！」

と、言われて相手にされません。

それでも尚、家から離れようとしなない貴公子たちは夜を明かしながら過ごすものも多く、その意気込みは引退間際に犯人宅を張り込む刑事のようでした。

この男達の中でも志が大したこと無い人たちは

「必要も無い出歩きは無駄だ無駄だ。随分お高くとまってらっしゃるけど、きつと我儘姫に違いない。」

と言って、二度と来なくなりました。
ある意味大正解です。

しつこい貴公子たちの中で、特にしつこく言い寄ったのは色好みと
評判の五人。

どうしても恋心が止まらずに夜中問わずやってきました。

このしつこいストーリーカーたちの名は、石作の皇子、庫持の皇子、右
大臣安部のみむらじ、大伴御行の大納言、中納言石上のまろたり、
と何とも憶えづらい名の方たちでした。

しかし、皆、身分の高い者たちだったのです。

身分の高い割には暇人のようですが。

どうか私の嫁になって下さい！（二）

お爺さんは、この五人の足下を見…いえ、熱心な求婚ぶりを見て、かぐや姫に

「仏のように大切な儂の子よ、仮にこの世に來た変化の人といつても、これほど大きくなるまで養つた儂にそろそろ恩返しを……」

と言いました。

言つてることが唐突かつ、最低です。

これを聞いたかぐや姫は

「何かチョームカツクんですけど。でも、まあ育ててくれたのは事実だし、何か聞いてやつてもいいかな。確かに、私人間とちよつと違ふけど、じじい達のこと親同然だし。」

何かますます口が悪くなっています。

足投げ出しちゃったりなんかして態度も悪いです。

それでもまだまだ容姿に騙されているお爺さんは、態度と口の悪さなんて何のその。

汚い言葉も美化されて聞こえてきます。

「恩返しを…じゃなくて、儂のことを親だと思つてくれてるなんて嬉しいのう。儂はもう70歳を越えた。とくに定年してる歳だし、竹取るのもきついし。もう疲れ果てていつ死ぬか分からないくらいですじゃ。だから、早くどっかに嫁いで玉の輿になつて、もつと安定して安心できる生活をさせてくれんかのう？ 国からの年金もあてにならないし。」

かぐや姫は、その話を聞いてすごく不機嫌そうです。

まあ無理も無いでしょう。

半分以上はお爺さんの私欲ですし、そのために嫁がされるなんてたまったもんじゃありません。

かぐや姫じゃなくとも怒りたくなります。

「はあ？それじじいの私欲じゃん！私行かないし、何でそんなのに付き合わなきゃいけないの？マジムカツク！！」

もつともな意見です。

しかし、お爺さんも一步も引きません

「かぐや姫よ、お前は変化の身だけど一応女だ。儂が生きてる間はこうやって居られるかもしれないが、五人のあの貴公子たちの事も考えて誰か一人と結婚しておあげなさい。そして儂に安定した生活を送らせてくれ、頼むから。」

「一応女って何さ！一応って！？でもさ、じじいの言ってるあいつらって結構金持ちなんですよ？それで金にも言わせて浮気とかしたら困るじゃん？いくらさ、貴公子だとか言っても、その辺訳わかんないしさ、どの程度の志でストーカー行為してるんだか分からないじゃん。だからイヤ！」

「随分なことを言うものだ。こうして夜を明かしてまで来てくれるというのに。それだけだって皆、志が深いことは一目瞭然じやろ！この親不孝者め！！」

お爺さんはいつも一言余計です。

そしてかぐや姫もお爺さんの口煩さと気合に押されて遂に折れまし

た。

ただし条件付で。

「じゃあいいですよ、嫁いでやりますよ。ああ、嫁いでやりますとも。でもー、ただ嫁ぐだけじゃつまらないしー、相手も決められないからーちよつとしたテストしようと思うんだけどー。私が見たいと思うものを持ってきてくれたら、まあ嫁いでやってもいいかなーって。」

お爺さんはこれを聞いて、暫く考えましたが

まあ、どの貴公子も金持ちだし金で買えないものは無いだろう。儂もやつらの財力の確認をするか

と、さらに悪巧みを重ね、かぐや姫に「よろしい」と言いました。

どうか私の嫁になって下さい！（三）

はてさて、日が暮れる頃に五人のストーカー、もとい貴公子たちは集合しました。

ある人は笛を吹き、ある人は歌をうたい、ある人は扇を鳴らし、人の家の周りでどんちゃん騒ぎをしている結構迷惑な奴らです。あきらかに近所迷惑です。

近所の家のおばさんが心なしかこつちを睨んでいるように見えますが、貴公子たちはそんなのお構いなしで騒いでいます。

そこへ、お爺さんが家から出てきて貴公子たちに

「こんなボロ屋に長い間、通つてくださり恐縮ですじゃ。かぐや姫に『早く孫の顔が見たいから貴公子たちの誰かに嫁いで儂を安心させておくれ』と言いましたところ、かぐや姫は『私が希望するものをちゃんと持ってきた人と結婚することにします』といいました。私はそれに賛成しましたが皆様はどう思われますかな？」

と、嘘ばかり並べ、貴公子たちに合つてるような、合つてないような説明をしました。

貴公子たちは、話を聞いて

まあ、金に物言わせりやなんとかなるだろう

と思い、その条件を飲みました。

貴公子たちも性格が何だか最悪な予感です。

お金持ちの考えることは分かりませんね。

して、それを聞いたかぐや姫はにやりとほくそ笑み、自分が欲しい

ものをお爺さんに伝えました。

「噂に聞いたんだけどさー、天竺辺りに『仏の尊い石の鉢』とか言うのがあるらしいのー。『石』繋がりで、石造りの皇子に頼んでー。でさでさ、何かね東の海に蓬莱って山があるらしいのー。そこに『茎が金で、実が真珠の木』があるらしいの。この前通販で頼んだら偽物で、みんなプラスチックでできてたから、本物のそれがほしいなあー。あ、それ庫持の皇子だっけ？そいつにやってもらおうとあ、一枝でもいいからさ。」

何だか現実が無いようなものばかり頼むかぐや姫。

実際、噂話で本当にあるか疑わしいものを希望しています。

お爺さんは、まさかこんな難題が出てくると思わず、啞然としてしまい、返す言葉がありません。

そんなお爺さんのことなぞ眼中に無いかぐや姫の要望はまだまだ続きます。

「あと唐にある『火鼠の皮衣』だっけ？それを、あーあれ。あの人にやらせて。大伴の大納言とか言う人には、『龍の頸に五色に光る珠』を取ってこさせて。石上の中納言には、『燕が持つてる子安貝』を一つ。そんなところかなー。」

お爺さんは、かぐや姫の要望を聞いて、たいそう驚きました。

こんな現実離れたもの、誰が持ってこようかと、儂の老後の暮らしはどうなるのか、と思ひまして、かぐや姫に再確認することになりました。

こんなこと言われたら誰だって嘘であって欲しいと願うものです。

「不可能なようなことばっかりじゃのう。そもそもこの国に無いものばかりですじゃ。今一度考え直してみなさらんか？」

お爺さんがなるべく優しく、かぐや姫の機嫌を取るようにそう言いました。

が、かぐや姫は不機嫌そうな顔をして

「はあ？難しいわけないじゃん。私のこと好きなら簡単でしょ？愛は地球を救うってよく言うじゃん？だったらそのくらいお安い御用じゃないのー？」

なんて言うものですから、お爺さんは仕方なく貴公子たちに事情を説明することにしました。

この事をお爺さんから聞いた貴公子たちは

せめて『二度と家の周りに来ないで下さい。次来たら警察行きです』とでも言ってくれたほうが気が楽だったのに…

と思い、しょんぼりして帰っていきました。

被害者、石造りの皇子

石造りの皇子は悩んでいました。

あんな無理難題を言われましたが、それでもかぐや姫をどうしても手に入れたくて、むしろ手に入れないとこの世に生きている心地がしないくらいです。

そして、たとえ天竺にあるものでも彼女の為に持ってこようと決意しました。

しかし…

いや、待てよ。天竺にも二つと無いものをどうして手に入れることが出来ようか

という考えが頭に過ぎり、かぐや姫には

「今日天竺に旅立ちます。行ってきます。」

と知らせておいて三年間その辺をぶらぶらして暇を潰しました。暇を潰すにはあまりにも長い時間です。

そして三年後、大和の国十市の郡にある山寺で賓頭盧の前にある、真っ黒になった、それこそ触りたくないほどのすす墨が付いている鉢を手に入れ、錦の袋に入れてかぐや姫宅にもって行きました。

かぐや姫は、

え？マジで持ってきたの？ありえなくね？ぶっちゃけありえないよね？

と、半信半疑でその鉢を見ると中に手紙が入っていました。広げてみますと

『海山の道に心をつくし果てないしのはちの涙ながれき（訳＊筑波の国を出て、山越え海越え野を越えて、血の滲む思いをして天竺にたどり着き、どうにかこうにか鉢を手に入れてきました。決して日本のだっかの寺でとってきたんじゃありません。本当です、信じてください。』
石造りの皇子より）』

と歌が書いてありました。

なんだか余計な訳がみえるので、偽物なのが諸バレです。

それでも、一応かぐや姫は、石の鉢にあると言われていてる光があるのかと確認しましたが、偽物なのでそんな光は何処にもありません。そこで、かぐや姫は石造りの皇子に

『しら山にあへば光の失するかとはちを捨ててもたのまるかな（訳＊偽物じゃん。光とか一筋も見えないんですけど。今の今まで何してたの？ウザインですけどー、私に見る目がないとでも思ってたんですかあ？マジふざけんなだし。鉢のせいで手が汚れたし。）』

と返歌し、真っ黒な鉢も返しました。

石造りの皇子は鉢を門の所に捨て置き、さらにこの歌に返歌しました。

『しら山にあへば光の失するかとはちを捨ててもたのまるかな（訳＊貴女様があまりに美しいからきつと光も消えてしまったのでしよう。私もそんな鉢をすてました。そして恥を捨てて貴女様の御心にすがりつきたい。私と結婚してください、お願いだから（泣）（泣）』

が、かぐや姫はたいそうご立腹で

「そんなこと言われても今更何？って感じなんですけどー。言っ

ることが何かキモイしー。」

と言って返歌しませんでした。完全無視です。
石造りの皇子はこれ以上どうすることも出来ずにトボトボと帰って
いきました。

因みに、鉢を捨ててまた言い寄ったことから、厚かましいことを「
恥を捨てる」というようになったそうです。
厚かましいのはかぐや姫の気もしますが…。

策略！庫持の皇子の陰謀！！（一）

庫持の皇子は大変な策略家でした。

まず朝廷には「筑紫の国で温泉療養してきます。最近肩こり、腰痛が酷くつて。」と、言っておきました。

そして、かぐや姫には「玉の枝を取りに行ってくるからー。」と使いに言わせて地方に下ろうとするので、お供の者たちは、難波までお見送りに行きました。

庫持の皇子は

「少数で行かないと。こんなにそろそろくつついてきたら邪魔くさいよー。」

と、くつついてきたお供たちに酷いことを言って、親しい少数の人を連れて船に乗り、旅立ちました。

そして見送った人たちは「よよよ…どうかご無事でー」と言い残し、都に帰っていきました。

しかーし！！

お供の人達は皆騙されていたのです！

3日後、誰もお供の人たちが居なくなつた頃を見計らい、庫持の皇子は帰ってきてしまいました。

そして、庫持の皇子は例の計画を実行することにしました。

その名も『玉の枝でうちあげ作戦』です。

あらかじめ命じていた、この当時は随一の宝とされていた鍛冶細工師6人を呼びつけて、人の近づかないような家（どんな家なのかは

ご想像にお任せします）を作り、かまどを作り、仕事場にしました。そこに、6人を閉じ込めて働かせ、自分も同じところに住んで、6人の仕事振りを監視しました。

庫持の皇子は、治めている莊園十六箇所を初めとし、蔵の財産やら何やら大層お金をつぎ込み、玉の枝を作らせました。

こんなにお金をつぎ込むのでは、きつとお爺さんとしては莊園をそのまま貰った方が喜ぶでしょうが、かぐや姫の要望なのでそういう訳にもいきません。

そしてついに、かぐや姫の言っていたのと寸分変わらず玉の枝を作りあげ、ひそかに難波に運びこみました。

「ただいまー、船に乗って帰ってきたよー。あー疲れた。」

と、自分の屋敷に使いをやり、自分はその場に酷く疲れた様子で座り込んでいました。

息切れしてるように見えるのは演技です。かえってわざとらしいですが。

そこへ、迎えの人々が行きと同様にぞろぞろやってきました。

迎えに来た人々は、自分達にお土産が無い事を不満に思いましたが、仕方なくこのグタグタな主人を屋敷に運んであげました。

そして、でっちあげた玉の枝は長櫃に入れて、風呂敷でくるんで都に運びました。

でも、持つて行くのでは途中盗賊とかに襲われる心配もあるので、先に都にある自分の屋敷に送っておくことにしました。

もちろん速達です。しかも書留で。

まるで受験生が願書を送るような送り方です。

そういうところに抜かりが無いのが庫持の皇子という人なのです。

さてさて、いつの間にやら庫持の皇子がこの玉の枝を都に持って

きたという噂が世間に広まり「庫持の皇子が優曇華うでんげの花を持ってきたそうだ。」と騒がれていました。

マスコミも真偽のほどを確かめようと走り回っています。

しかし、この噂を聞いたかぐや姫は喜びもせず、かえって不快に思っていました。

何で、この世にないもの頼んだはずなのに持ってくるわけ？玉の枝なんてあるわけないじゃん。通販カタログにも「伝説の玉の枝」って書いてあったのに。伝説ってことはないんじゃないの？あれ？あれ？ちょー、やばいんですけどー。

庫持の皇子も酷いですが、かぐや姫も酷い！

策略！庫持の皇子の陰謀！！（二）

こうしてかぐや姫が動揺を隠し切れないでいるところに、庫持の皇子がにやにやと「我こそかぐや姫を得たり」という顔でやってきました。

わざわざ使いの者に、かぐや姫宅のインターホンを押させ、

「旅から今帰ってきました。旅の姿のままで申し訳ありません」

と言いました。

お爺さんはこれを聞き、玄関先で庫持の皇子と会い、立ち話を始めました。

散々世間話をした後に庫持の皇子が

「命を捨ててこの玉の枝を取ってきました。我が妻…いえ、かぐや姫にお見せください。」

と言って、お爺さんに玉の枝を渡しました。

玉の枝には手紙が結び付けてあります。

早速お爺さんはかぐや姫に玉の枝を見せました。

かぐや姫は玉の枝に結び付けてある手紙をとって広げました。そこには、

『いたづらに身はなしつとも玉の枝を手折らでただに帰らざらまし（訳＊この身が朽ちようと果てようと、何があろうと絶対に手ぶらで帰るなどしなかったでしょう。さあ、この私と結婚してください。他の者では貴方を幸せに出来ません）』

と書いてありました。

訳はいささか深読みの気もしますが。

なんか益々うざいんですけどー。

というのが、かぐや姫がこの歌を見た第一印象でした。

翁はかぐや姫の隣でうつとうしいくらいに、にこにこしています。
そしてかぐや姫に

「かぐや姫や、お前が言った蓬萊の玉の枝を、こんな素晴らしいものを寸分違わずに持ってきてくれたぞい。これがあるだけでも儂の老後は安泰じゃ。こんなものを儂たちにくれたんだからこの人に嫁ぎなさい。それに旅をした後に直接大急ぎでお前の元へやってきたのだ。きつとお前に尽くしてくれる人に違いない。そんな人だから儂と婆さんの面倒も見てくれるじやろう。老人ホーム送りとかしなさそうだから、絶対この人に。」

と言いました。

半分以上が私欲からこの人を勧めています。かぐや姫の幸せなど二の次でお金しか頭にありません。

いつのまにか玉の枝を自分の懐に入れていきますし、強欲なお爺さんです。

それを聞いたかぐや姫は…というより聞いていたんだか聞いていなかったんだかどちらともとれない態度で珍しく頬杖をついてぼーっとしています。

「これ、かぐや姫や聞いておるのか」

「……あ、ごめん大音量で音楽聴いてた。」

そう言うなり耳からイヤホンを外すかぐや姫。

やっぱりかぐや姫はかぐや姫です。どうやら先ほどウザイ歌を見てしまったので音楽を聴いて気持ちを落ち着けようとしたようです。

はてさて、かぐや姫の気分を害すような歌を贈った庫持の皇子はというと

「こんな頑張って玉の枝を取ってきたんだからもう嫌とは言えないよなあ？」

というやいなや縁側に這い上がってきました。

此処までくるとストーカー行為プラス不法侵入と罪は重くなりますが、こうして玉の枝をとってきたのだから身内同然だろうというのが庫持の皇子の考えでした。

お爺さんもこの考えに賛成で、

「何とも素晴らしい玉の枝です！このたびは僕もかぐや姫も喜んでおります。今回はどうして断れましょうか、はっはっはっ、めでたいめでたい。」

と言い、庫持の皇子と二人で呵呵大笑しています。

この頭がおめでたい二人の横でかぐや姫は、

きいー！！ホントにうざい、マジうざい。じじいも何なの？人の気持ちも知らないで！だいたいたいさ、嫁ぐ気なんて更々無かったけどじじいたちの言うこと聞かないですっつと断ってんのも気の毒だから無理難題だして断ろうとしてんのに！

と、庫持の皇子が玉の枝を持ってきたことを忌々しく思っていました。

ぼーっとしているように見えますが、実際は庫持の皇子に対して腸が煮えくり返っているのです。

そんなこととは露知らず、翁は若い二人の為に寢床の準備を始めました。

…って何でいきなり寢床なのさ！！

策略！庫持の皇子の陰謀！！（三）

お爺さんは、二人の寢床の準備をしながら、庫持の皇子の話を聞いて……と言ってもでつち上げの旅話ですが、ころつとそれに騙されてしまい、庫持の皇子に歌を詠みました。

『くれ竹のよよの竹取り野山にもさやはわびしきふしをのみ見し（訳＊竹ばかり昔からとってきた私ですが、そんな辛い目は野山でも合いませんでした。決して仕事をサボっていたわけではなくて）』

この歌を聞いた、庫持の皇子は「いやいや、どんな苦しみも、かぐや姫を妻に出来るこの日を思えばどーってことありませんでした。」と、散々苦勞話をしておいてからそんなことを言つて

『わがたもとけふかわければわびしさのちぐさの数も忘れぬべし（訳＊苦しんで流した涙もすっかり乾いてしまったようです。そんな事はいいいからかぐや姫をよこしなさい）』

と返歌しました。

こんな和やかなムードで、うふふ、あははとやっていたその時です！！

六人の男達が庭に現れました。

お爺さんは突然のことに驚いて「誰だ！」と声を上げました。その一声を待っていたかのように男六人組は決めポーズをとり、

「六人合わせて、給料欲しいんジャー！」

と言いました。

きつとこの人たちは日曜日の朝にやっている戦隊モノの見過ぎなんでしょう。

この‘給料欲しいんジャー’のレド的存在の人が前に出てきてお爺さんと庫持の皇子に言うことには

「私の名は内匠寮の細工人、漢部の内膳と言うものです。その皇子様にお仕えし、玉の木を作っていました。飲まず食わずで急いで作り上げたというのに、低賃金どころか一文もくれません。こんな人が高い役職にいるから日本の未来はお先真つ暗なのです、と言われたくなければとつと仕事に見合う給料を下さい。もう心も体もボロボロです。」

だそうです。

心も体もボロボロの割には決めポーズしたりと元気が有り余っているようにも見えますが、とにかく給料を払わずに働かせるのはけしからんことです。

漢部の内膳はさらにポケットから文を取り出して差し出しました。

「これはどういふことなのかう？」

頭にクエスチョンマークを浮かべ、首を傾げ、庫持の皇子の顔はみるみる青ざめていきます。

そこへ、かぐや姫がやってきて文を受け取りました。

手紙を広げてみると

『庫持の皇子は千日の間、私達と一緒に家に住み、ごろごろしながら私達を監視し、玉の枝を作らせました。出来上がったら官職を与えようなどと言っておきながら一文もくれません。今考えると作つた玉の枝は、貴女が求めていたものかと。あの人給料をくれない

のなら、もう身内同然になった貴女から給料を頂戴したいと思います。』

と、書いてありました。

かぐや姫はこの手紙を見て、につこりと爽やかな笑みを浮かべ

「ええ。とーぜん高い給料は支払われるべきでしょう」

と言つて、鬼の首を獲ったかのように庫持の皇子に向つてにやりと笑い、お爺さんに

「ねー、じじい。こいつ偽物で私のことだまそうとしたよー。オレオレ詐欺とかキャッチセールスとか靈感商法よりたち悪いー。もう最悪つて感じー。こんな人に嫁がせる気？きつと最初は良い顔してても、後々わかんないよ？こんな嘘つきは。」

と言いました。

お爺さんも納得して、懷から玉の枝を出し

「人に作らせたやつなら値打ちは低いし、ちよつともったいない気もしますが、返すのは本物よりたやすいのう。」

そう言いながら玉の枝を投げて返しました。

かぐや姫の心は晴れ晴れし

『まことかと聞きて見れば言の葉を飾れる玉の枝にぞありける（訳＊結局偽物じゃん。ちよーウけるんですけど。残念でしたー。危うく引つかかるところだったけどー、マジ危なかったけど、どんでん返しみたいなの？言葉を飾ったような玉の枝なんていらなかつたの。）』

と返歌しました。

庫持の皇子は、目でお爺さんに助けを求めましたが、あれほど意気投合していたお爺さんも今まで自分が騙されていたことを恥ずかしく思い、寝たふりをしていました。

かぐや姫はかぐや姫で、庫持の皇子の方を向いて勝ち誇った顔をしてにやにやしてますから、どうすることも出来ません。　庫持の皇子は、暫くどうすることも出来ずに座っていましたが、辺りが暗くなるのに乗じて逃げ帰ってゆきました。

…あれ？6人の給料は？

策略！庫持の皇子の陰謀！！（四）

「あの…私達の給料は…」

と、ついさつきまで忘れ去られていた‘給料ほしいんジャー’の情熱のレッドがボソリと呟きました。

それを聞いたかぐや姫は偉そうに「近う寄れ、苦しゅうない」と言つて六人を自分のそばに呼んで、

「なんかありがとー。あんた達のおかげでちょー助かった。危うくー、あのキモイ人の嫁にされちゃうとこだったしー。マジ感謝ー。」

と言つて、褒美をたくさん渡しました。それらの金銀財宝は全部お爺さんの所持品です。

騙されそうになったお爺さんへのちょっとした嫌がらせのようです。褒美を受け取った六人は何回もかぐや姫に感謝の言葉を言つて、屋敷を後にしました。

が、六人組はこの後酷い目に合うことになります。

「よかったな。ちゃんと褒美がもらえて。」

「うんうん、金にならん仕事なんぞやりたくないものな。」

などと会話をしながら意気揚々と帰り道を歩いていると、ちょうど人気の無いところで背後から何者かに襲われました。

襲った連中は、彼らをボコボコに殴り、かぐや姫に貰った褒美までとりあげてしまつたのです。

「な…貴様らは、誰なんじゃ…」

「ふふ、良い気味よのう。私はこれだけでもまだまだ、おぬし達への恨みは晴らせぬわ。」

月明かりに照らされて、ゆらりと其処に立っていたのは庫持の皇子でした。

怒りとも、悲しみともつかない表情で未だ、自分の家来に殴られている6人組を見て、フツと気の抜けたような笑みを浮かべ

「このような事をしていることも、かぐや姫を得られなかったことも一生の恥だなあ。どれくらい恥ずかしいかというと、皆の前で黒板消しトラップに引つ掛かってしまったくらい恥ずかしいわ。きつと世間の人が私のことを笑いものにするだろう。」

と言って、その場からいなくなっていました。

その後、仕えていたものたちや、知り合い、近所の人たちなどなど皆で色々なところを捜しましたが見つかりませんでした。そのうち人々も

「きつと死んじやったんだよ。あんなことしたら恥ずかしいものー。」

と言って搜索をやめてしまいましたが、実は彼は死んでいませんでした。

恥ずかしさのあまり、身を隠していたのです。皆は一体何処を捜していたのでしょうか？

大きく勝負に出て、策略にも長けてるくせに、気の小さい皇子なのでした。

敢え無い！阿部のみむらじー！（一）

右大臣安部のみむらじは、財力があつて一族が繁栄していました。有名な、言わずと知れたお金持ちのお坊ちゃんなのです。

そんな彼が、かぐや姫から頼まれた品は、火鼠の皮衣、でした。

そんなもの、日本にあるわけ無いよな…。もしあれば私の一族が手にしているはずだし…

と思い、その年にやってきた唐の貿易船の持ち主である王慶という人に

『今、日本にとてつもない美人で美しい姫がいるんです。彼女を娶る為には、火鼠の皮衣』とか言うのが必要なんです。是非それを買ってきて送ってください。』

とお手紙を書いて、信用の置ける小野の房守という人を手紙に添えて派遣しました。

房守は、

げっ！？なんで俺が行かなきゃなの？自分で行けよ！

と思いながらも中国に行き、王慶に手紙と金を渡しました。

王慶は手紙を広げて「美人」と「美しい」は同じ意味じゃないですか？ということはあるえて指摘せずに、返事を書くことにしました。

『そんなものこの国でも噂だけで見たことは有りません。もしこの世にあるなら人がこの国にもってきてもよさそうなものです。非常

に難しい商いです。ですが、ひよつとしたら天竺のお金持ち辺りが持つてるかもしれません。尋ねてきましょう。もし無いのなら頂いた金は返します。それと、貴方のよこした使いの者が毎日愚痴を言つてうるさいんですけど、どうしたらいいですか？」

その唐の国からついに船がやってきました。

「小野の房守が帰朝して、京へ上ってくる」ということを右大臣安部のみむらじは聞いて、急いで自慢のスポーツカーを走らせて迎えに行きました。

途中、スピード違反に対する検問をやっていて、追いかけられましたが、振り切つてきました。

まあ、この駿馬ならぬスポーツカーのおかげで房守は筑波から7日間で帰つてこれたわけです。

「ただいま、帰りましたー。これ手紙と例のものですー。」

そう言つて、それらを差し出す房守に

「お前、散々向こうで愚痴漏らしてたろ？」

と言つて拳骨をくれて、それらを受け取りました。
そこに書いてあることには

『やつとのことで、火鼠の皮衣』の皮衣を手に入れました。ひー疲れた。全く年寄りになんて重労働を…まあ搜したのは家来で私は何にもしてないけど（＾―＾）容易に手に入れられるものじゃ有りませんでした（＜―＞）「昔々、天竺の聖職者がこれを身につけて唐にやってきて、それが唐の山寺にある」と聞いて、やつとのことで

買い取つてのお届けです。(。^*) 「対価の金が少ない」と
か言われましたが、そこは私が立替ときました(´・`・´)ですから
あと五十両のお金を頂戴したいのです(´・`・´)もしお金を下
さらないのであれば皮衣を返してくださいm(――)m」

と、書いてあるのを見て右大臣安部のみむらじは

「何をお思になるのか。あと少しのお金ではないか。嬉しい限り
だ。」

と言つて、唐の方角にお辞儀をしました。

「ところで小野の房守くん？」

「へい、なんでしょう？」

「向こうで王慶さんに顔文字教えてたでしょ？相当暇してたんだね。」

「いえ、そんなことは(´・`・´)」

「いいよ、バレバレだから……」

敢え無い！阿部のみむらじ！（二）

右大臣安部のみむらじは早速、王慶が送ってくれた‘火鼠の皮衣’とやらを見るために包んであった風呂敷を解きました。

その品は箱に入っていたのですが、まあその箱というのもとても立派で様々な瑠璃を混ぜて細工してあります。この箱だけでも相当な価値があるものと思われます。

そして、肝心の中身である‘火鼠の皮衣’ですが、こちらもまた立派で紺青でありながら毛の先は金色に輝いてました。

こんな立派なものは見たこともありません。

鑑定に出せば必ず‘いい仕事してますねえ’なんて言われそうなくらいすごい貴重な品のように思われました。

もう、火に焼けないとかそんなのが問題じゃなく、どう言ったら良いかわかりませんが、とにかく凄いんです。

その美しさには右大臣安部のみむらじも惚れ惚れしてしまいました。こんなお宝は私の家で保存しておきたいと思いつつも

嗚呼、成る程。このような品ならかぐや姫もさぞ欲しがらるだろう。毛皮店に行ってもこのような品は拝めまい。

などと考え、この品を送ってくれた王慶が居る唐の方を向いてもう一度お辞儀をしました。

その後、すぐに‘火鼠の皮衣’を箱の中にしまい、木の枝につけ、自身の化粧をして、

今日はこのままかぐや姫宅にお泊りだな。うつしっしー

と思い、歌を添えて持っていくことにしました。
その歌は

『かぎりなき思ひに焼けぬ皮衣袂かはきて今日こそは着め（訳*今までの思ひは火のように燃え上がって、濡れていた衣も乾くでしょう。心地よい着物で初夜が過ごせそうですねえ。）』

と、詠んでありました。

右大臣安部のみむらじは皮衣を持って、かぐや姫宅の前で立っていました。

近所の人に「あの人がかしら？門番かしら？」という目で見られていても、まったく気にしません。

そのうち、お爺さんが出てきて例の品を受け取り、かぐや姫に見せるために家の中に入っていきました。

かぐや姫は、おじいさんからそれを受け取り、せっかく右大臣安部のみむらじが詠んだ歌は「何か下心まるみえー」と言っただけと投げ捨て、箱の装飾も気にせずに「火鼠の皮衣」の品定めを始めました。

「立派な皮に見えるけどー、立派過ぎるっていうかイメージと違っているかー。てかー、本物かわかんないしー。」

そんな事をばやくかぐや姫に対してお爺さんは

「とにかく！あのお方を招き入れてあげなさい。世間では類を見ない立派な衣じゃ。お前がそうやって結婚を断って世間の人を惑わせるのはよくないことだぞ。なんせ儂の夢見たリッチな生活が中々果たせないのじゃから。」

「思いつき私欲じゃん！！」

そんなこんなで右大臣安部のみむらじを座敷に呼んで座らせました。

今度こそ、今度こそかぐや姫を結婚させて豊かで安定して安心した生活を！

と、お爺さんだけでなく厚化粧して出てきた以来出てこなかったお婆さんもそう思っていました。

夢の生活が出来ないこと……いえ、かぐや姫が結婚しないことを二人は大変嘆かわしく思っていたのです。

「身分の高い人と結婚させて、自分達の身分も高く！」なんて思っ
て画策するのですが、かぐや姫が遠まわしに「嫌」というので、
強制できずに居ました。

だからこの期待も最もなのです。

敢え無い！阿部のみむらじ！（三）

あれこれと出世と金儲けしか考えてないお爺さんに対し、かぐや姫は結婚したくないからどうにかしなければいけないという事ばかり考えていました。

かぐや姫はご存知の通り家庭に縛られるタイプではありませんし、結婚したら今皆が持っている自分の清純なイメージが崩れてしまうことを、彼女は自分自身でよく理解していました。

そこで、かぐや姫は右大臣安部のみむらじが持ってきた‘火鼠の皮’を実際に焼いてみようとお爺さんに提案しました。
お爺さんはそんなこともろん反対でしたが

「だーいじょうぶだって。本物なら焼けないじゃん？それで偽物かどうか分かるんだから安いもんじゃーん」

と言うかぐや姫に押し切られてしまいました。

一応、お爺さんは右大臣安部のみむらじのところに「かぐや姫がこのような言ってますが…」と言いにいくと、右大臣安部のみむらじは

「この皮は唐の王慶さんにまで協力してもらい天竺から仕入れたものです。絶対に本物ですから、焼いちゃっても構いません。どうせ焼けないでしょうから。」

というので、実際に燃やしてみることにしました。

かぐや姫は右大臣安部のみむらじが自信満々なので本物だったらどうしようかとドキドキしていましたが、とりあえず自分の懐から護身用のジッポのライターを出して火をつけてみました。何故、護身にライターなのか、何から身を守るかなどは謎ですが。

ともかく、火をつけた皮衣は普通に燃えてしまったのです。

「やっぱ偽物じゃーん。また騙されそうになるとか私どんだけー。そついう星の元にうまれたんかなー？」

結婚しなくて済むということから清々しい顔をしてそんなことを言うかぐや姫の横で、右大臣安部のみむらじは顔が草の葉の色になって座っています。

青ざめるの通り越して草の葉の色なんて重症です。

安部のみむらじを見て、ちよつと哀れに思ったのか、かぐや姫は箱に歌を入れて返しました。

『なごりなく燃ゆと知りせば皮衣思ひのほかにおきて見ましを（訳*うちに持つてくるくらいなら観賞してりゃーよかったのにー）』

ごもつともな意見を言われ、言い返す術もなく安部のみむらじはトボトボと帰っていきました。

この一件の後、世間の人はかぐや姫宅の人に「結婚するの？」とか「皮衣の噂は本当？」とか色々聞きまくったのですが「火鼠の皮衣は偽物で燃えちゃったから結婚しないよー」と言われたので、この一件のように、やり遂げられないものを「安部」にちなんで「あへなし」と言うようになったとかならないとか。

俺様的な大伴御行の大納言（一）

‘龍の頸の玉’なんていう最もありそうにないものを頼まれた大伴御行の大納言は、自分の家に居る人たちを呼び集めて

「龍の頸に五色の光を放つ珠があるらしい。それを取って献上する者がいたら願いを叶えてやってもいいかなー」

と言いました。

どうやら大伴御行の大納言は自分で取りに行く気なんて更々ないようです。お金持ちは面倒臭がりなんでしょう？
その話を聞いて家来達は

「何でも叶えてくれるというのは有難いチャンスでございます。しかし‘龍の頸の玉’ですって？本当にそんなものあるのでしょうか？というより仮にあったとしても相手は龍ですよ？とる前に命を落としたりでもしたら妻や子供達が悲しみます。無理です。もっと簡単なものにしてください。」

と言いました。

「そうだ、そうだー」という声が家来達の声が聞こえる中、大伴御行の大納言は着物の裾から一枚の紙を取り出し、家来達に見せ付けました。

「皆のもの、これが目に入らぬとは言わせぬぞ？」

「そ、それは！！」

一枚の紙、それは家来達との契約書だったのです。

大伴御行の大納言は、ニヤリと笑って契約内容を読み上げ始めました。

「この契約書にはなあ『主君に仕えるという事は主君のために命を投げ出す覚悟を決めて仕える』とか『主君の命令は絶対』とかその他色々書いてあるぞ？まさか読まずに契約したわけではあるまいなあ？」

「ま、待つてくれ！本当にそんなこと契約書に書いてあったか？」

皆が不満や疑問でざわざわと騒ぎだしたところに、これが証拠だと言わんばかりに一人一人が交わした契約書を配り始めました。

「ちょっと待つてくれ、そんな事は一言も書いてな」

「ふん、お前達の目は節穴か？目を凝らしてよく見るがいい。」

目を凝らしてみても何も見えないと言う不満が聞こえてきたところで大伴御行の大納言は虫眼鏡を配りました。

虫眼鏡で契約書の下のほうを見ると、なんと先程大伴御行の大納言が言ったことが書いてあるではありませんか！！

「さらに炙り出して契約内容が浮かび上がるようになっていくから消そうとしたって無駄だぞ。」

何と姑息な！

暴君です！悪徳商法じみてます！！

「どうだ、分かっただろう？お前達が俺様に仕えるという事は命を君主のために差し出しても構わんと言う事だ。この国にもない、か

といって唐や天竺のものでもない。何故なら龍は動き回るものだからだ。遭遇確率もある。取るのは他のものが出された課題より簡単かと思われる。それでも行けないと申すか！行けないなどといったら打ち首だ！」

真正正銘の暴君です！

走れメロスに出てくる王様もさすがにこの人には敵わないでしょう。家来達も仕方なしこの命令に従う事にしました。

「そういうことなら、仕方ありません。例えどんな困難が待ち受けていようと命に代えて任務を遂行しましょう。」

「そうだよなー。この私に仕えていると世間の人は知っているし、もし俺様の命令に背いたとしたら世間からはどういう目で見られるのかちゃーんと分かっているよなー？」

「め、滅相もございません！！」

「なら宜しい。あーはっはっはっ！」

すっかり機嫌が良くなった大伴御行の大納言は大口を開けて笑っています。

家来達は相当頭にきていたのですが、ここで打ち首になったり職を辞めさせられてしまえば家族が路頭に迷う事になるので逆らう事が出来ませんでした。

家来達は任務遂行の為の旅支度をし、門の前に集合しました。

大伴御行の大納言は、いつもの派手な着物を着て門の前で皆を待ち、皆が揃ったところで食糧やお金などを渡しました。

そうです、旅支度もしないで皆に物資を配ると言う事は、しつこい

ようですが、この人は旅に行く気なんて更々ないのです。
それを裏付けるかのように

「俺様は家で潔斎でもしていよう。あ、お前ら龍の頸の玉取ってくるまで帰ってくんないよ？」

潔斎とは酒や肉食などを謹んで心身を清める事です。
旅に出る家来達に比べればなんと楽なことでしょう。
家来達は、嫌な顔をしつつも屋敷から出発しました。

とは言うものの、何処にいるか分からない龍を探しに行くのですから、当然どっちに行つてよいか分かるはずありません。
そこで家来達は

「『龍の頸の玉を取るまで帰ってくるな』なんていうのだからこの際どっちの方向でも構わない。思い思いの方向に歩いてみよう」

と言つて適当な方角に歩き始めました。

「なんと、無茶な事をいうものだ」

「考えなしだ。」

「こんなしょーもない命令をするなんて納得できない」

と、悪口を言いながら旅路を進んで行つたことはいうまでもありません。

何でこんな主君に仕えちゃったんでしょうね？

俺様的な大伴御行の大納言（二）

さてさて、家来達が旅に行ってる間に大伴御行の大納言は

かぐや姫を迎え入れるんじゃ普通の家では見苦しいかな？

なんて、迎えることが決まったわけでもないのにしょーもない心配をして、屋敷を劇的に改造することにしました。改造というより、建て直しです。

立派な建物を作り、漆を塗り、蒔絵で壁を作り、屋根を装飾し、とても言葉では言い表せないような素敵な家にしました。こんな家に住まわしてくれるとなれば、どんな女性でもイチコロで結婚を承諾するでしょう。

ところで、大伴御行の大納言には妻……いえ妻達が居ました。

かぐや姫を迎え入れるとなれば、妻達は目の上のたんこぶ、非常に邪魔です。

大伴御行の大納言は妻達に高額なお金を渡し、家から追い出してしまいました。

あんまりです。

ですから、大伴御行の大納言は立て直した豪華な屋敷で一人吉報を待っていたのです。

ところが

何日経つても、年が明けても、家来達からは何の音沙汰も有りませんでした。当然といえば当然です。

待ち遠しくて、居ても経つてもいらなくなりまして大伴御行の大納言は自分の足で難波に行くことにしました。

身分がばれないように、変装して其処に行くと、其処に船人が居ました。

「もしその船人よ、大伴御行の大納言の家来が龍の頸の玉を取ったという噂などを聞いていないかね？」

と、たずねると

「変なことを言うんですね。そんなこと出来るわけありませんよ。そういった船の噂も聞いてませんし」

と言われてしまいました。

大伴御行の大納言は馬鹿にされたと思い

俺様の身分も知らずになんという無礼なことを言うのか。私ならば龍を殺して玉を手に入れられるものを

と考え、ついに臆病な家来など待たずに自分で行こうと決意しました。

船に乗って、あっちこっちに揺られ、進み、随分先に行ってから行き先を筑波の方に定めたそうです。

どうしてお金持ちは先に自分で行動しないんでしょうねえ？

俺様的な大伴御行の大納言（三）

先頭は仕方なく船を出しました。

暫く舟を漕いでいると、どうしたことでしょうか。強い風が吹いてきて、波は荒れ、辺りは暗くなり、船も思うように進むことが出来なくなりました。雷も光っています。

大伴御行の大納言は船酔いで吐きそうになりながら

「おええええー。気持ち悪い…。今までになく船が揺れて…。おええええー！どうなってしまうんだろ…。おげえええー」

と言っています。喋るか吐くかどちらか一方に絞って欲しいものです。これでは聞いている方も吐き気を催してしまいます。

文句も言いたくなりますが、こんな状況じゃ仕方ないですよ、と先頭が割り切って言うことには

「私も長い間船に乗っていますが、こんな酷い目に合ったことはありません。おっとつと……このままでは船の転覆、もしくは雷に撃たれる可能性もあります。幸いにして神のた、たた助けがあったとしても南海に吹きやられるでしょう。こんな有りもしないものを求めてこんな日に船を出せと言われる主人に仕えて無駄に命を落とすそうですよ。ヨヨヨ…」

と泣いて嫌味を言っています。こんな日に海に連れ出されれば、しかも死にそうな目に合えば誰だって恨み言を言いたくなるでしょう。それを聞いた大伴御行の大納言がこれを聞いて言うことには

「おええつ。ふ、船に乗っては船頭の言う事を、聞くものだ。そ、それが頼りないことを申すでないっ！」

とか何なとか言って逆ギレしています。

つまりは、船頭が何とかしろ。私は船に乗っただけだし全部お前任せなんだからな！ということです。

なんという言い分でしょう。船頭だって無理矢理この我儘大納言に借り出されただけなのに。むしろ非があるのは大伴御行の大納言の方です。

船頭は怒りを通り越し、呆れ果てて、このお馬鹿な大納言でも分かるような言い回しで、自分は無実だし、頼られても困るのだと言うことにしました。

「あのですね、私は神様じゃないんですよ？天候を操れるわけじゃないし、何も出来ないんです。きつと、龍を殺して玉を取るなどと言ってるから龍が怒ってやってるんですよ。助かりたければ私にすがるより神に向ってお祈りなさいませ。」

「そうか、そうしよう」

単純です。

大伴御行の大納言は早速神に向って祈り始めました。

「おお、神様よお聞きください。愚かにも龍を殺そうとした俺様を許してください。これから俺様は改心して龍の毛一本動かすような真似はいたしません」

まずは自分の事を俺様というのを直せよと言いたくなりますが、それはさて置き、大伴御行の大納言はこれを千回も言いました。

その甲斐があつたのかやつとのことで雷が止まりました。

それでもまだ空は光っていて、強風が吹いています。

船頭は言いました。

「ほらみなさい。やっぱり龍の仕業だったんですよ。風は強いですが、ね、良い方向に向って吹いてますよ。決して悪い方向じゃありません。良い方向に向って吹いてるんです」

「ごめんなさい…もうしません、ごめんなさい」

完璧なまでに怯えてしまつて人の話なんか聞いちゃいません。

こうして3、4日間良い風が吹いて、無事に船は陸に着くことが出来ました。

砂浜を見ると播磨の明石の浜なのでありました。

大伴御行の大納言は

「南海の浜に吹き寄せられたのだろうか」

と思つて喘いで、伏してしまいました。

船の船頭がおつきの者が国府に告げたけれども、国司がお見舞いに来ても、起き上がらずに船底に伏したままです。

松原に、筵を敷いて船から降ろすと、その時初めて

「嗚呼、南の海ではなかったのか…」

と言つて起き上がりました。

そしてその姿は重い風病のせいで腹はぽっこりと膨れ、目は酷く腫れています。

これを見て国司もあまりにこの姿が面白かったので笑つてしまった

そうです。

笑われて当然かも。

俺様的な大伴御行の大納言（四）

はてさて、大伴御行の大納言自身が龍の頸の玉を取りに出掛け、失敗して帰ってきたということを風の噂に聞いた家来達は、あんな君主でも少しは心配になつてなのか、あるいはどんな痛い目にあつて戻ってきたのか見たいが為なのか、君主のところに戻る事にしました。

戻ってきた家来達が、言う事には

「龍の頸の玉を取る事が出来ませんでしたので、今まで戻ってきました。大伴御行の大納言様も『玉を取る事は不可能だ』とお分かりになつたようなので、もうお咎めはないだろうと屋敷に戻つてまいりました。すいませんでした（棒読み）」

正当なことを言いつつ、身の保身もしています。そして加えて棒読みで「私は悪くない」というのをさり気無く主張しています。

この家来達は結構やり手のようです。まあ、こんな暴君に仕えているのだから自分達がしつかりしていないといけないでしょうし、当たり前前的事とも言えましょう。

それを聞いて大伴御行の大納言は体を起こして、

「おお、お前達よ。よく持ち帰らないでくれた。あの頸の玉を取つたらどのような災いが起こるか分からぬよ。あの頸の玉を取ろうと考えただけでこのような目に合ったというのに：おう、おそろしや。こうなつたのもあのかぐや姫とか言う悪党のせいだ。顔も見せないくせに人にあれやこれを取って来いと言い、殺そうとしてののだ。お前達も気をつける、二度とあの家の前を通るでない。俺様も気をつけよう」

そうです、良く気付きました。すべては我儘姫のかぐや姫が諸悪の根源なのです。

未だに自分のことを俺様と言うのは直っていませんが、かぐや姫が悪いという事を良く理解したのは登場人物の中でもこの大伴御行の大納言が一番でしょう。

その点は誉めてもいいのかもしれませんが。

大伴御行の大納言は十分に反省し、戻ってきた家来達に褒美を渡しました。

こんな話を聞いて、別れてしまった奥さんは大笑いです。

糸を貰かせて造った屋根も、鳥に巢の材料として持っていかれてしまいました。

大伴御行の大納言は殆んどのものを失ってしまったのでした。

世間の人たちが言うには

「大伴御行の大納言は龍の頸の玉を取りに行つて戻ってきたそうじゃないか」

「いやいや、身につけていたのは二つの眼に李のような玉だよ」

「ああ食べ難いことを」

と言いました。この「食べ難い」が「耐え難し」の語源で、常識外れで出来ない事を指すようになったんだとか。詳しい事は分かりませんがね。

燕巢スープ？いや、子安貝。石上の中納言（一）

さてさて、中納言石上麻呂足何て言う長ったらしい名前の持ち主が頼まれたものは「燕の子安貝」でした。こんな漢字ばかりの名前もややこしいので石上の中納言と呼ぶ事にしましょう。

石上の中納言は「燕の子安貝」と聞いて、

なんか簡単そうだなー。子安貝って安産のお守りだったような……はっ！？もしかして僕に気があるからこのようなものを頼むのでは！？

なんて思っていました。

石上の中納言は酷い妄想壁があるようです。

他の貴公子達と同様、自分で動くのは億劫なので、家来のいる所へ行き

「あのさ、燕が巢を作ったら僕に教えて欲しいんだけど」

と言いました。

家来達はそれを聞いて首を傾げて

「何にお使いになるんですか？日本で取れる燕の巢はスープには出来ませんよ？スープにするのは種類の違う燕のようですから……」

「違う！違う！」

家来の言葉を聞き、石上の中納言は首を大きく横に振りしました。

「ち・が・う・の・！……いいかい？僕の丈夫な子を産もうとしてい

る人がいるんだよ！是非ともその子に燕の子安貝を取って持つて行ってあげたいんだよ！」

と、妄想をたつぷり練りこんだ説明をしました。
家来達は、

ああいつもの妄想が始まったよ

と思いつつ、せめてもの慈悲で石上の中納言に燕の子安貝なんてあるわけが無いという事を教えてあげることになりました。

「いいですか？たとえ燕を殺しても何処にも見当たらないものなのですよ？子安貝というのは。子供を産む時に何処から子安貝をだすのでしょうか？」

「そうです、それに噂によると人が見ようとすると無くなってしまふとか」

そんな微妙に遠まわしな説得をしている最中に、偶然家来ではないけど面識のある人が通りがかりました。

「何の話ですか？おや燕の巢？もしやスーブに…え？違う？子安貝をお探しなんですね。そういうことでしたら、諸国から集められた米や穀物を扱う役所の炊事場の建物のところに毎年沢山の燕が巢を作るところがあります。家来達に頼んで見張らせておけば、よろしいでしょう。沢山の燕ですから、子を産まないということはないかと…」

と言いました。

それを聞いた石上の中納言はぱあっと目を輝かせ

「ナイスアイディーア！！いいよ、それグッドだよ！！いい事教えてくれたよ！！」

と、喜ぶのでした。

家来達の説得も通じることなく、石上の中納言は他の家来達を20人くらい呼び寄せて「ちよつと、これこれこういう事情なんだけど行つて来い」ということで遣いに出しました。

家来達は足場を組んだものの、そのあまりの高さに怯えてしまい、誰一人巢の中を覗こうとは思いませんでした。

有るか無いか分からないものの為に危険なことをするなんて誰だつてやりたくありません。

そんな事は露知らず、石上の中納言は「取ったか？子安貝取れたか？」としつこいくらいに屋敷から遣いを出して聞いてきます。

家来達はどうしようかと迷った挙句

「そんなこと言われても、こんなに人が居たら燕だつて怯えて来ません」

と返事を出しました。

石上の中納言はこれを聞いて大層悩んでしまいました。

燕巢スープ？いや、子安貝。石上の中納言（二）

誰も燕の巢から子安貝を取ってこようという気配はないし、燕の巢の中を覗いてみようという気も皆無さそうなので、石上の中納言は困り果てていました。

どうしよう、このままじゃ愛しのマイハニーに子安貝渡せないよ

）

すべてこの人の妄想ですが、ツツコミを入れているとキリが無さそうなので敢えて無視でいきましょう。

まあ、くだらない妄想に囚われ、頭を抱えてうーんうーんと悩んでいるところへ、燕の巢がある役場に勤めているくらつ麻呂という翁が「子安貝をとりたいたいならば策略をお教えしましょう」と言うことで、石上の中納言の所にやってきました。

石上の中納言とくらつ麻呂の翁は部屋の間に行き、額を寄せ合い、コソコソと話し合いを始めました。

「今の方法を見ていると非常にまずいですよ。家来達が言うようにあんなに人が居ては燕たちも寄って来ません。あんな足場など壊してしまつて、信用できる家来を一人だけ残し、燕が安心したところで取らせるべきです。」

石上の中納言は「グットアイデアだよ」と納得し、家来を一人残して他の者達を皆撤退されました。

普通の人なら言われるまでもなく、こんなに人が居ては燕は来ないと分かるはずですが、妄想の中で生きている彼には難しかったようです。

石上の中納言はくらつ麻呂の翁に聞きました。

「燕の巢に人をやるにはどのようなタイミングがいいのかなあ？」

これに、くらつ麻呂の翁曰く

「燕はですね、子を産もうとする時は尾を上げて7回回ってワンツと鳴…きはしませんけど、とにかくその様に産み落とすように見えます。7回回つてるときに人をやりなさい。」

だそうです。

まあ、こんな聞くからに当てにならないような話を石上の中納言は信じ込んで、大喜びし、多くの人には知らせないで、役場にお忍びで行き、自分で燕たちの動向を見守りました。

まあ、疑う事を知らないというか、やっぱりボンボンは世間知らずなんですかね？

そうそう、くらつ麻呂の翁には

「僕の家来でもないのに良い事を教えてくれたね。これをあげるよ！」

と言い、石上の中納言は自分が着ていた着物を脱いで彼に渡したそうです。

そして、「改めて夜になったら、此処に来なさい」と言って家に帰したそうです。

この翁が金品目的で嘘教えてる詐欺師だったらどーするんでしょうねえ？

燕巢スーブ？いや、子安貝。石上の中納言（三）

日が暮れたので石上の中納言が例の寮に居ると、あのくらつ麻呂とか言つ翁が言つたとおりに燕が巢を作っていました。

嘘みたいですが、彼が言つたように燕が尾を浮かせてくると回っています。

チャ～ンス！

と思い、石上の中納言は大きなかごを用意して、その中に家来を入れて持ち上げました。うーん、この描写だけじゃ良く分からないでしょうから、補足すると井戸水汲む原理です。紐引つ張ると持ち上がる感じ。この時の為に石上の中納言は前々から用意をしていたのでした。

燕の巢の近くまで持ち上げられた家来は、燕の巢の中に手を入れましたが、何も見つかりません。

「たいちよー、何もないであります！」

「誰が隊長だ。誰が。もういい、僕しか出来そうにない、ちょっと降りろ！」

そう言うなり、石上の中納言は家来を籠から引き摺り下ろすと、自分が籠の中に入り家来達に持ち上げるように命じました。

燕の巢の仲で未だに、燕はくるくる回っています。燕が後ろを向いた瞬間に石上の中納言は巢の中に手をつ込み、そして歓喜の表情を浮かべました。

「やった！！あつたよ！僕は何か掴んだ！！下ろして、下ろしてっ

て……ぎゃゝゝ……！」

テンションの高さといい、子供っぽい言動といい何となくウザくなったので家来は持つていた紐をぱつと放しました。案の定籠は急降下。籠は壊れ、何とも美しくないかたちで石上の中納言は壊れた籠の下から這い出してきました。

「痛いよぉ、何するんだよ。僕は今とーっても機嫌がいいから何があっても許してあげちゃうけどさあ、普段の僕だったら切腹とか命じてるよ？君の命だけじゃ済まないからね？君の家族もみーんな塵だよー？」

イタイのはお前の頭だと言いたいのは山々ですが、何か物騒なことを言っているの口に出すのは辞めませう。

とにかく、石上の中納言は手に何か握っているようです。本人は確認もせずに伝説の子安貝だと喜んでおりますが、果たして本当にそうなんでしょうか？

それを確認する前に、一つ確認。石上の中納言、立てません。這い出してきた体勢のままです。

「あの一、一体何をなさってるんで？」

「白々しいねー、君たちは！君たちのせいで腰打っちゃったんだよ！」

どうやら落ちた瞬間に腰を強打し立てないようです。ギャグ漫画みたいな展開のくせして、こういうところではしっかり再起不能です。こんな莫迦殿はほつといて、問題なのはやはり彼の手に握られているものでしょう。

辺りはすっかり暗くなっているので家来の一人が蝋燭を持ってきま

した。

蠟燭の灯り下で手を開いてみると、そこにあっただのは何と……！

「……殿、これは……」

「………」
「……これは……」

その手に握られていたのは燕の古い糞でありました。

「嘘だ……！よりもよってこの僕がこんな汚いものを……ってか何で子安貝じゃないんだYO」

「おいたわしや、手の中に貝はない……ん？貝がない……甲斐がない！？」

甲斐なしはここから来てるといわれています。

「どーでもいいよ、そんなことは」

燕巢スーブ？いや、子安貝。石上の中納言（四）

自分の腰を犠牲にしてまで（成り行きですが）、掴んだものが実は貝ではなかったと言う事実にはショックを受け、寝込んでしまいました。まあ、腰が再起不能ですから当たり前でしょう。

子供っぽいことをして（いつものことですが）、求婚が駄目になったことを、ナルシスト（プラス妄想壁）の石上の中納言は人々に知れるのを大層恐れていました。

求婚より自分の悪い噂が流れてしまう方が正直嫌なのです。

こうした経緯を、久々に登場するかぐや姫が聞いて、お見舞いの歌を贈りました。そこには、

『年を経て浪立ち寄らぬ住の江のまつかひなしと聞くはまことか（訳＊落ちて腰打って再起不能とか超ウケるー！私のところに子安貝持つてこない奴なんか待つ甲斐がないしー。）』

‘貝’と‘甲斐’が掛かっています。かぐや姫にしては上手い歌です。

「これはお見舞いの歌と言うのか？」という疑問は置いて、石上の中納言はこの歌を見て、家来に紙を持たせ苦しい気持ちをおさえ、やつのことで返歌を書きました。

『かひはかくありけるものをわびはてて死ぬる命をすくひやはせぬ（訳＊ごめんよマイハニー。けど君から歌をもらえるなんて少しは甲斐があつたみたいだよ。）』

そう書き終わった途端に石上の中納言は息絶えてしまいました。本望なのか何なのか、ちょっと気の毒な気がします。

かぐや姫もこの件については少し気の毒に思つたみたいです。

カグヤ姫ノ人間性ガ1上ガツタ!!

おっとなんでしょね、このどっかのクエストみたいなレベルアップは。

兎にも角にもここからまた「甲斐」についての言葉が生まれました。少しだけ嬉しいことを「甲斐があった」と言うようになったそうです。皮肉ですねー。

この人ならいけるか！？帝さま！！（一）

さてさて、話は変わりました、かぐや姫の器量がこの世に類を見ないほど美しいことを帝がお聞きあそばされました。何故、この性格の悪さが伝わらないのか疑問に思いますが、それはこの辺に置いてつと。

帝がおっしゃるには

「沢山の人の身を滅ぼしてまで結婚や契りを結ばないというかぐや姫は一体どんな人なのか曆は気になって仕方ないおじゃ。内侍の中臣の房子や、見届けてまいれ。」

だそうです。見届けてくるも何も、「沢山の人の身を滅ぼして」なんて言つといて悪女だと気付かないんでしょうか？帝は危険なかぐや姫わーるどに足を踏み入れようとしている状態です。今なら思いとどまれるものを、その姿見たさに使いのものを出してしまいました。

さて、使いにされた房子さん。かぐや姫宅に着くと、お爺さんとお婆さんが驚いた様子で迎えてくれました。帝からの使いですから驚くのも当然でしょう。というより、この爺さんと婆さんは日本一の権力者にかくや姫を嫁がせれば莫大な富が　なんていう勘定をして驚いているんでしょうが。

そんな二人のリアクションに特別感情を抱くことも無く、房子さんは此処へ来たわけを説明し始めました。さすがエリート、いちいちツツコミを入れるようなキャラではないということですね。

「帝様がですね、『かぐや姫の容貌が優れているようなので見て参れ』と仰せられるので、お宅にお伺いさせていただきました。」

「ならばそのようにいたしましょうか。」

房子さんの言葉を聞き、今まで全然目立たなかったお婆さんが、かぐや姫のところへ言付けに行きました。

かぐや姫はいつも通り、ポテチをかじりながらテレビを見ていました。口の周りには食べかす、手は油だらけ……こら、絨毯で手を拭くんじゃない！

「ちよつと、かぐや姫や……」

「あつ、ばばあ久しぶりー。何か用？」

「来客ですよ、来客。貴女に会いたいという人が来てるんです。さあさ、ちゃんと支度をしなさい。」

「それあれでしょ？ほら、杓文字持つて歩つてー、人の家の晩ご飯見てくおっさんでしょ？えーと、確か……隣の晩」

「ちがーう！帝からの使いの者です。早くお会いしなさい。一攫千金のチャンスかもしれないですよ！」

さすが似たもの夫婦。お金になる話には目がありません。

かぐや姫は内心呆れていました。ストーカー、もとい五人の貴公子たちは誰一人としてかぐや姫の欲しいものを持つてくることが出来なかったですし、どれも大した男じゃありませんでした。どうせ帝もその手の者だろうと思っていたのです。まあ、あんな無理難題を遂げられた方が凄いというのが一般論ですが、かぐや姫にはそのように考える思考が欠落していたのです。箱入りに育てすぎてしまったようですね。

しかし相手は帝（の使い）。きつとお婆さんも簡単には引いてくれないでしょうから、何か良い言い訳は無いかと思案した挙句、かぐや姫はらしくもなく「ふう」と溜息を漏らしました。

「私さー、そんな可愛くもないし綺麗じゃないでしょー？鏡に聞いたわけでもないしー。それなのにそんな期待されてさー、その期待裏切るようなら申し訳ないもんねー。だから会ーわない！」

おやおや、セリフに異国の御伽話の例えが入っています。ここは日本です。しかも昔の日本です。グリム兄弟など存在しません。無視しましょう。

お婆さんはその言葉を聞いて困ってしまいました。けれども此処で引くわけにはいきません。何て言ったって、相手は帝なのですからその命令に背くわけにはゆかないのです。

「そう言ってもですね、一攫千金のチャンスを逃すわけにはいかないんですよ。あと、帝の使いの者を疎かには出来ません。」

あれ？帝後回し……？

そんなお婆さんの言い分にかぐや姫は呆れ果て

「はあ？別に帝が側に置いてくれるって言ってもー、嬉しいとか恐れ多いとか思わないしいー。」

と冷たく言い放ちました。その態度があまりに冷たいので、お婆さんは気後れしてそれ以上強く出ることが出来ませんでした。

「てな訳で、あの親不孝者は思考回路が幼稚な上に強情なので、

貴女様にお会いしそうにありません。」

と、お婆さんは房子さんに事情を説明しました。やっぱりお婆さんの頭の中には富と権力のことしかないので。でなければ、わざわざ親不孝者とか言いません。

ここで房子さんの思考が高速回転し始めました。

かぐや姫の顔が見れない 任務失敗 帝に怒られる 同僚の笑いものに……

「わ、私はですね、かぐや姫の容貌を確認して来いと言われてこんな辺鄙な土地までわざわざ来てるんですよ！？それを何もしないで帝様のところに帰ろうものなら、怒られます！同僚からも笑いものにされ、私の地位や名誉も失われ、プライドもズタズタになります！こうなったら慰謝料どころの話じゃなくなりますよ！？何としても連れて来てください！」

頭の良さそうな言い回しをしていますが、どちらかというと私情中心です。とにかく要約しますと、「何としてでも任務を成功させたので連れて来い」と言ったところでしょうか？エリートさんは、自分の身の保身のためなら強く出られるのだから怖いものです。

お婆さんは、仕方なくもう一度かぐや姫を説得に行きましたが

「そんなお偉い帝様のー、命令にー逆らってるって言っんならー、早いとこ私を殺しちゃえばあ？」

なんて言うものですから、なす術がありませんでした。

この人ならいけるか！？帝さま！！（二）

結局、房子さんは何の成果も上げられぬまま帰路につく事になりました。その顔は蒼白で、上の空で「プライドが、地位が…」とかぼやいています。

そして、帝にこの事をそのままお話しました。賢明な判断です、房子さんは何も悪くないのですから。帝もそれが分かったのか頷くと、「そうか…それが多くの人を殺してのけた心というものおじゃか。房子よ、ご苦労でおじゃ。」

と言い、この話はそれっきりになりました。さすが帝様、天に等しいと言われた帝様が檻樓屋の成り上がりの姫様にこだわることもないと言うことなのでしょう？まことに賢い判断でございます。

が、帝もやはり人の子でした。

帝と言えばその命令には誰も逆らわず、

「して参れ。」

と何か命令すれば、皆は

「ははあゝ。」

と従いますよね？ですからこの帝にとって自分の命令に逆らう者など初めてなわけございまして、「絶対負けねえ」と闘争心に火が点いてしまったのでございます。

帝は作戦を練りました。そして「かぐや姫を陥落するにはまず周りから！」という結論に至り、早速お爺さんを呼び出しました。

「さてこの間、磨はそちの家に居るかぐや姫なる者の顔が見たいと使者を派遣したが、その甲斐もなく終わってしまったおじや。普通ならあるまじき行為、このままにはしておけないでおじやる！」

語尾を気にせず、お爺さんがかしこまって返事という名の言い訳を申し上げることには

「この愚か者の親不孝者の娘は宮仕えなどしそくにありません。我々も手を焼いているのでございます。そう申していたと今から言付けて参りますおじや。」

あ、語尾移った。

これを聞いて、帝は首を傾げます。「何故、磨の語尾を…」ではなくて、

「そち達の娘であろうに、何故思い通りにならないのじゃ？」

お爺さんは口を噤みました。

帝はお爺さんがかぐや姫を庇っていると思ったのか、にやにやしなからある条件を持ち出しました。

「もしかぐや姫とやらを献上させることが出来たのならば、磨の力でそなたに爵位を与えても良いおじやよ？」

爵位を与えらるうことは、貴族の仲間入りだということです。いくら大富豪になったお爺さんでも、この先あと何年この生活がせく

が続くか保障されているわけではありません。爵位を貰えるとなれば、竹取生活ともおさらば。今以上の贅沢三昧が出来ることでしよう。こんな美味しい話にお爺さんが食いつかない筈がありません。今まで貴公子たちのように一時限りの贅沢品では到底得られないような地位なのですから。

お爺さんは諸手を上げて大喜びで家に帰って行きました。

この人ならいけるか！？帝さま！！（三）

お爺さんは家に帰るなり、早速お婆さんに事情を説明しました。

「婆さんや、実はな。いや、耳を貸してくれ……（うんうんによによ）」

「うんうん……えゝ！？…うん…ぐはっ！！」

「ちょ、じじい！それどういうことよ！」

仲睦まじく内緒話をする2人の間にかぐや姫が無理矢理割り込んできました。お婆さんは、うつ伏せに床に倒れこみ、お爺さんは腰を抜かしています。

「か…かぐや姫や、いつから其処に」

「最初から居たっつーの！最初からー！内緒話とかちょーウザいんですけどー。しかも丸聞こえだしー。じじいは爵位欲しさに私を帝に売るんだー。」

この言葉にお爺さんは何も返せませんでした。言い方が悪いですが、お爺さんがしようとしているのはまさにそういうことなのです。しかし口箆ったのも一瞬のこと。直ぐに「いや、儂らの夢の生活が」と、小声でこによこによ言い始めました。

「宮仕えとかー、私向いてないしー。そんなのしたくないんだよねー。でも確かにじじい達には世話になってるしー」

「じゃ、じゃあ！」

「でもー、だったら私、じじいたちに爵位が手に入ったらその後は死ぬからねえ？」

一瞬淡い期待を抱いてしまったお爺さんですが、再びかぐや姫が自分たちを突き放すようなことを言うので酷くがっかりしました。

でも良く考えてみてください。お爺さん達は金銭目的でもあります。かぐや姫に幸せになつて欲しいだけなのです。けれども、かぐや姫はそんな事を望んでいません。かぐや姫の為を思うならその意見を尊重し……つてそれが出来れば苦労はしない、やっぱり金銭目的の中心ですね。どうやらこの場合は良い話で丸く治める事は不可能なようです。

しかもお爺さんは、かぐや姫の「宮仕えするなら死ぬ」っていうのは嘘だと思っているようです。ですから、もう少し説得すればかぐや姫も折れてくれると思っていました。

「爵位が手に入つたからと言って、我が子と会えなくなるのは僕とて辛いじゃ。それに何も死ぬことはなかるうに。何が嫌なのじゃ？どうして僕達の事をもつと考えてくれないのじゃ！」

最後の一言がいつも余計です。これさえなければいいのにとはいいますが、そこがお爺さんの短所でもあり長所でもあるのです。良く言えば自分に正直、悪く言えば自分の欲に正直。

ブツン

「もしかしてさあー、じじいは私が死ぬって言ってるの嘘だとか思ってるでしょー？」

音を立て、ついにかぐや姫がキレました。こうなると誰も手がつけられません。暴走モード突入です。

「ええよ、ええよー。だったらー、わてを宮仕えさせてー、死なないかどうか試せば良いだけの話じゃろがい！わてはなー、色んな人の思いを無駄にして此処に居るんじゃない。それなのに、相手が帝だからと言って2つ返事で受け入れたら人聞きが恥ずかしいじゃろがい。分かってんのかぁ？ゴラァ！」

もう一人称とか喋り方とか色々変わっています。いつもギャル語を話している人が急にこんな喋り方を始めたら誰だって驚きますし、怖くなります。

お爺さんもそうなったように

「こ、これでは逆らわない方が良さそうじゃ。帝にかぐや姫の意向を伝えてこようぞ……」

と行って、逃げるように帝のところへ向かいました。

この人ならいけるか！？帝さま！！（四）

「まあ、というわけで『宮仕えしたら死ぬ』なんて言うものですからどうする事もできませんでした。申訳ございません。」

かぐや姫から逃げるように帝のところへ参上したお爺さんは、先程の出来事を帝に話しながら、あのドスの効いたかぐや姫の声を思い出し、たいそう顔色が悪くなっております。

「実はですな……あれは実の私の子ではございませんでしてな。竹の子なんですじゃ。いえ、土から出てきたのではなく竹を切ったらあれが出てきましたな。ですからきつと気性も普通の人ではないんでしょうな……恐ろしや」

「成る程、でおじや。ところでそちの家は山の麓に近いそうでおじやるな。狩りに行くフリをしてかぐや姫を見るとするのはどうでおじやかな？」

お爺さんの話に適当に相槌を打ち、狩りに行くフリをしてまでもかぐや姫に会いたいなんて余程かぐや姫のことが見たくてしょうがないんでしょう。それと「おじや」の使い方が何か変です。無理矢理の気がします。

「まあ、ぼーっとしている所へ不意を突いて行けば見れるかもしれませんか？」

なんて事をお爺さんが言ったものですから、後日帝は突然

「麿は狩りに行きたいおじゃ！てか今すぐ行くおじゃ！」

てな感じで我儘を言い出し、そう言ったにも関わらず狩りそっちのけで、かぐや姫の家にずかずかと入っていききました。今までの貴公子たちの中にはストーカー行為をやってから不法侵入なんて人も居ましたが、何の前触れもなくずかずかと家に入る人は帝が初めてです。この傲慢さといい、家来を振り回す我儘さといい、かぐや姫といい勝負かもしれません。

一歩家に入ると、家の中は光で満ちていました。この光とはかぐや姫が放っている美のオーラです。え？家の中の至る所に照明が？そんな馬鹿な。

更に奥へ進むと、素晴らしく美しい姿で座っている人が見えました。手には何か持っています。

この人がかぐや姫で間違いないでおじやな？

と、その時かぐや姫と目が合ってしまった。

「何かキモイのが家の中に居るしー！じじいとか誰か居ないのー！？生理的にこういう顔の人嫌なんですけどー！！」

目が合うなりかぐや姫は言いたい事を言いたい放題叫び、違う部屋へと隠れようとしてました。

しかし帝も此処まで来たならもつと良くかぐや姫を見たい、あわよくば連れて帰りたいと思い、その袖を掴みました。

「ま、待つておじゃ！」

「ひいー！！触られたー！マジキモいー、おじゃとかキモイしー！てか私のおやつのにぎりー落としちゃったじゃないよー。ウザさMA Xみたいなー！！」

かぐや姫は本当に帝のことが嫌いなようです。それと手に持つていたのは、おやつのにぎりーだったみたいです。色気より食気ですね。一方帝はと言うと、かぐや姫の美しさを大層気に入ってしまいました。美しさが気に入ったのか、或いは性格が似ているので気に入ったのかは定かではありませんが、とにかく気に入ってしまったのです。

その袖を掴んで決して放そうとはしませんでした。

「放さないでおじゃよ！（ニヤニヤ）」

その時の帝の顔といったら大変はしたなく、とてもゴールデンタイムに放送できるような顔ではありませんでした。まるで時代劇に出てくる悪代官のような顔で、仮に放送するなら昼メロの時間帯か、深夜帯です。どんなに酷い顔なのかはご想像にお任せします。

そんな酷い顔の帝にかぐや姫が耐えられるはずもなく、喚き散らしています。

「放せ、放せっつーの！どこの誰だか知らないけれど、私とアンタじゃ生まれた所が違うの！てか根本的に何もかも違うし！こんな薄汚いボロボロの雑巾みたいな奴と一緒にの出身とか思いたくもないし！最低！マジ最低！放せ！！」

ボロボロの雑巾みたいな奴　　よっぱど酷いのでしょね。

普通帝にこんな事を言えば死の宣告は免れませんが、帝は莫迦……ではなくて、心が広いお方なので敢えて聞き流しました。

「嗚呼、良いでおじゃるよ。もつと磨を罵っても良いでOJARU YO」

て、こんな言葉は真に受けてるし！そして喜んでいます。帝様はそういう趣味のお方なんでしょうか？深入りするともつと嫌なものを見そうなのでこの辺にしておきましょう。

罵られながら、そして足蹴にされながらも帝はこの外見だけは（そう、外見だけは）美しい姫君を連れて帰ろうと、待機していた家来に命じ、御輿を持ってこさせましたが、その途端かぐや姫はするりと帝の手から逃れ、影だけのものになってしまいました。此処でようやく帝は気付きます。

「誰かが言っていたおじゃ、かぐや姫は土から生えた竹の子だと。成る程、普通の人ではないのでおじゃな。」

誰かって、それを話した相手はお爺さんです。しかも色々と間違っ
て覚えています。話を中途半端に聞いていると思ひ込みで恥を搔く
良い例ですが、天下の帝様には誰も逆らいませんし突っ込みません。
そう、帝と対等に張り合えるのはこの人だけなのです。

「誰が竹の子だっつーの！！」

ほらね。かぐや姫は元の姿に戻り、帝をグーで思いつきり殴りました。

後日、帝はお爺さんに官職を与えたそうです。

別に与えなくても良いのではないかと思うのですが、帝は大層機嫌が良く、かぐや姫に殴られて出来た痣を嬉しそうに撫でていたそうです。

この人ならいけるか！？帝さま！！（五）

「ついに、ついに夢にまで見た官職が！！」

お爺さんは官職を与えてもらったことに対し、諸手を挙げて喜びました。どうせお金のことを考えているに違いありません。

お爺さんは此処で帝に自分の財力を見せ付ける為に、盛大な宴会を開きました。お爺さん一家に仕えてる人などを呼び集め、皆にご馳走を振舞ったそうです。

まあ、この財力というのはかぐや姫のおかげで出来たようなものです。この時点でかぐや姫は結構な親孝行をしていると思います。態度は些か悪い気もいたしますが、お爺さんとお婆さんが大好きなお金を与えているのですから問題は無いでしょう。

しかし、人間というのは強欲な生き物。お金が手に入ると今までの生活を忘れ、更なる富を築きたがるのです。お爺さんとお婆さんは、その典型的な例でした。

そんな宴会もお開きになる時間が来ました。

帝はかぐや姫をその場に残して帰るのを心残りに思い、まるで魂をその場に残したようにお帰りになるのです。

そして御輿に乗った後に、かぐや姫にこんな歌を贈りました。

『帰るさの行幸もの憂く思ほえてそむきてとまるかぐや姫ゆゑ（訳
＊帰るのも足を止めて振り返ってしまうでおじゃよ。グーで殴られたあの感触、嗚呼、忘れられないでおじゃ。）』

それに対し、かぐや姫も返歌しました。

『葎はふ下にも年は経ぬる身のなにかは玉のうてなをも見む（訳＊

こんな蔓草が絡んでるような家に来なくても結構です！てか来んな
！」

今回は訳が大分間違っていますね。正しい訳は自分で調べましょう。
ともかく、帝はこの歌を見て、余計に帰りたくなってしまうた
のです。此処に居たいとも思いましたが、かぐや姫宅の敷地からは
出てしまったし、こんな所で一晩過ごすのはさすがにキツイので仕
方なくお帰りになりました。

帝は帰ってから、宮中に居る女官達の顔を良く見て回りました。

「あの者に比べると大したやつが居ないでおじゃ。」

「んまあー、失礼しちゃうわー！」

つまり、かぐや姫と女官達の顔を比較して回ったわけです。

普段懸命にお仕えしている女官達から見れば、帝のやっていること
は最低ですし、屈辱的でもあります。大した奴が居ないなんて言わ
れれば、女性なら誰だって怒ります。其処のところの空気が読めな
いのが帝様。思ったことがすぐに口に出てしまうようです。

何はともあれ、帝はかぐや姫がどれだけ素晴らしい女性かを再認
識し、物思いにふけるようになっていったのです。

まあ、ポテチの油を絨毯で落とすような奴、普通なら願い下げです
けど、かぐや姫のそんなはしたなく、だらしない部分を知らない帝
はかぐや姫が相当好きになってしまったようです。

嗚呼、あの叩かれた時の感触、思い出しただけでも良いでおじゃ
るなあ。

……なんか違いますね。

叩いてくれる人なら誰でも良かったような気がします。それが偶々、かぐや姫というこの世のものではないような美しさを持った女性だったわけです。実際、この世のものではなく竹の（以下略）。

それから帝は夜を一人で過ごすようになりました。

よつばどの事情がない限り、后たちの部屋にも行かなくなりました。「后が居たんかいっ！」と、ツツコミを入れたくなりますが、物思いにふける姿を見ると何だか可哀想になってきます。

おや？何か書いてますね。

『かぐや姫へ。元気にしているでおじやか？磨はとっても元気でおじゃ。』

何ともまあ、ありきたりな書き出しの手紙を書いています。宛先はかぐや姫へです。しかも、喋った時の語尾がそのまま文面に出ています。教育係は何を教えてたんでしょう？

これを受け取ったかぐや姫はと言うと、一応返事は書いていたようです。

けれど、その内容というのは「うざい」とか「キモい」とか帝を罵るようなとっても失礼且つ不愉快な言葉ばかりでした。

しかし、寛大な（？）帝様はこんな言葉を喜々とした表情で受け入れ、四季折々の和歌など添えて性懲りもなく、かぐや姫に手紙を出すのでした。

いや、物好きも居るもんなんですねぇ。

ヒロインよ、永遠に！（一）

『もう一度磨の頬を思いつき叩いてほしいのでおじゃ。あの感触、痛み付きになりそうでおじゃ。』

「うざい、マジウザイ！」

こんな風にして、かぐや姫が帝を手紙で罵り…もとい手紙でお互いが心の慰み合いをしている内に、あつという間に3年が経っていました。

かぐや姫の成長は止まったようで、3年経ったからと言って決してお婆さんみたくはなっていません。美しいまま、その姿を留めております。全く都合が良いですね。

そんなある春の始めの夜、月が美しく空に輝いているのを見て、かぐや姫は物思いにふけるようになりました。

お爺さんが、月を見て団子を連想してそれが食べたいのかと、お婆さんに団子を作らせてみましたが、どうやら違うようでした。それどころか

「じじいったら普段どういう目で私を見てんの？浪漫の欠片も無いじゃん！色気より食気！？」

なんて言われてしまい、どうすることも出来ませんでした。

まあ、普段は色気より食気のかぐや姫なのでお爺さん達にそう思われても仕方が無いのです。

こんなお爺さん達ではなく、御付きの者が「月の顔を見るなんて不吉な事ですよ。」と、止めましたが、隠れてこっそり月を見ては、涙を流すようになりました。

あの、天下御免のかぐや姫が涙を流しているのです。ただ事ではありません。

時は流れ、その年の七月十五日。

その日は丁度満月でした。その日もまた、かぐや姫は縁側に座り月を見て酷く物思いにふけているようでした。

御付の者達はそんな様子を見て、お爺さんに

「かぐや姫は最近になって普段より月を良く見て、物思いにふけているようでございます。」

と言いました。

お爺さんの考えは気楽なもので

「あの丸い月を見て、丸顔ぼっちゃりの帝様でも思い出しておるんじゃない。やはりお年頃かのう、はっはっはっ。」

なんて言っています。

しかもサラリと帝の事を「丸顔ぼっちゃり」なんて言っています。あれだけ恩を受けといてなんていうことでしょうか。

御付の者はお爺さんの頓珍漢な発想に溜息をつきながら、今度はこの頭がお目出度いお爺さんにも分かりやすく言っただけにしました。

「あのですね、私が言いたいのはそのうちのことではなくて。何やら大層思い悩んでいる事があるようですから、気をつけてあげて下さってことなんです。わ・か・り・ま・し・た・か・！？」

「あ、ああ。そういうことじゃったんかいな。」

どうやらお爺さんは御付の者の言葉をようやく理解したようです。凄まじいと分らないなんて、普段人の話をまともに聞いていないからそうなるのです。

そう言われたのでお爺さんは一応、かぐや姫に直接憂いの理由を聞いてみることにしました。

「これ、かぐや姫よ。何をそんなに月を見て憂いておるのじゃ？儂が官職に就いたりと色々と満ち足りておる生活なのに何がそんなに不満なんじゃ？」

「金銭的に満ち足りて満足なのはじい達だけでしょー？そういうのウザインですけどー。」

確かに、贅沢三昧が出来て嬉しがっているのはお爺さん達だけです。そもそもかぐや姫は、帝に求愛されようと、どれだけの富を築こうと、そんなものには興味が無いのです。

でも、ずっと貧乏暮らしならそれはそれで文句を言っていたと思いますが。

「……月を見ると世の中が儂く感じられるんだよねー。月の満ち欠けに合わせ時は移ろってくしー。まあ、嘆いてなんていないけどさー。」

そう言うとかぐや姫は自分の部屋に下がってしまいました。

いつもは食べ物の事ばかり言っているかぐや姫が、らしくもないことを言うのでお爺さんは心配になり、部屋に居るかぐや姫の所に行きました。

かぐや姫は自分の部屋でもやはり物思いにふけっているようだし

た。

「ほれ、やっぱり何か悩んでいるようではないか。あれか？今の暮らしが不満なのか？もっと金や富が欲しいとか……」

「そう思ってんのはじじい達だけって何度言わせんの？マジうざいし……」

かぐや姫の口の悪さはいつもと変わりませんが、どこか言葉に力が無く、弱々しい感じでした。

金のことしか考えていないお爺さんも、さすがにそれには気付いたようで、やっぱり何か悩み事でもあるんだろぅから言ってみると詰め寄りましたが、かぐや姫は首を横に振りました。

「別に何も思ってないってばー。ただ何となく心細く感じるだけだつっーの。」

「それはきつと月を見るからじゃ。お前が居る限りあの月のように儂の財力は欠けたりせん。だから安心して此処に居なされ。儂のためにも。」

「だーかーらー、思いつきり私欲じゃーん。この業突じじい。そんなじゃなくてさ。第一、月見ないで過ごせなんて無理だつっーの。」

そう言うとかぐや姫は、部屋から出てまた縁側に座り月を眺め始めました。

お爺さんは、ちょっとお金を強調し過ぎていじけたのかと、今更ながら反省しましたが、かぐや姫はお爺さんの言葉なんか気にも留めていませんでした。ただ、月を見ていると心細くなり、けれども月

を見ないことも出来ないなんていう複雑な心境なのです。

月が出ていない時は、物思いにふける様子は無いのですが、月が出ると物思いにふけり、溜息をついたり、涙を流したりしています。かぐや姫が涙を流したり溜息吐いたり、この異常事態に侍女達は

「やっぱり何か思い悩んでいる事があるんだわ。」

「そうよ、きっと思い悩んでいる事が……って私の煎餅取らないですよ！」

「隙がある人が悪いんですー。（バリバリバリ……）……って辛ッ……！」

「残念でしたー。私は辛いのが好きなんで激辛煎餅なんですよー。で、何の話だった？」

と心配していましたが、この人たちも、もちろんお爺さんとお婆さんも、かぐや姫の悩みが一体何なのか分からないままでした。

ヒロインよ、永遠に！（二）

八月十五日近く、いつものようにかぐや姫は縁側に座り月を眺めていました。けれどその様子は、いつにも増して酷いものでした。何が酷いかって？もう人目も気にせず大声を上げ泣いている事です。声は近所迷惑になるくらいの音量ですし、涙でメイクがとれかかっています。涙と一緒に付け睫毛が流れる光景なんて滅多に見られないでしょう。

こんな姿を見て、やはりただ事ではないなと、お爺さんとお婆さんはもう一度泣いている理由を尋ねて見ました。すると、かぐや姫は此方が泣きなくなるような答えを返してきたのです。

「前にもー、言おうと思ってただけどー言っちゃうとじじい達が動揺するかなーと思って言えなかったんだよねー。てか、じじい達のせいで言うタイミング逃してたって言うかー。でもーこのまま言わずには過ごせないっばいしー。」

「じゃから、泣いている理由は何なのじゃ？」

「ぶっちゃけー、私って人間じゃなくて月の都の人なわけー。色々あってー此処に來ただけどーそろそろ帰んなきゃなのー。迎えも来るっばいしー。それが今月の十五日なわけ。時間無いじゃん？あと何日か後じゃん？それまでの間ーじじい達の暗い顔してるのも嫌だったからさー、春頃から悩んでたわけー。それって避けられない事だしー。」

どうやらかぐや姫はかぐや姫なりに、お爺さんとお婆さんに気を遣

って本当のことが言い出せなかったようです。

いつもギャル語を使い、態度はでかく、2人のことを下僕のように扱っていたかぐや姫ですが、実はお爺さんとお婆さんのことを親のように思っていたらしく自分も辛いようです。

性格がひん曲がっている様に見えますが、根は良い子なのです。

お爺さんかというと、この言葉を聞いて大層衝撃を受けました。

「何イイイ！？竹の中から貴女を見つけ、育て始めてから何年も経ちましたが、貴女に会ったその日から大判小判がざつくざく。そんな金の生る木……いや、幸運の女神のような貴女を迎えに来るなんて一体何処のどいつじゃ！けしからん、誠にけしからん！儂の安定した老後の生活を奪いにくるとはぶえっ！！」

かぐや姫との別れより、お金と別れなければいけないことを悲しんでいるようなお爺さんの鳩尾に、かぐや姫の鋭い肘鉄がクリティカルヒットしました。

「じじい、金のことしか頭に無いのかよ！もーやだよー、私だつてじじい達の事心配して中々言い出せなかったのに。えーんえーん（棒読み）」

2人とも大声で泣くわ叫ぶわ、どうしようもない状況です。

え？かぐや姫の声が棒読み？いやいや、そんなことあるわけないじゃないですか。本当ダヨ？

「私さー、月の都に本当の両親が居るのー。僅かな間だからとか言われてこつちに來たけど、何か騙してたっぽくて、こんなに時間が経っちゃったわけ。そんな酷い本当の両親忘れてー、じじいとはばあのこと本当の親みたいと思ってた。月に帰れるとか言っても悲しいだけで全然嬉しくないんだよねー。」

月の都の人といえど、かぐや姫は、お爺さんと、いつの間にかいたお婆さんと抱き合い、酷く泣いてしまいました。

この屋敷に仕えている人たちも、かぐや姫が居なくなると思うと寂しくなり、湯水も喉を通らず、お爺さんとお婆さんと同じくらい悲しい気持ちになりました。

「なんかさあ、かぐや姫が月の都へ帰るらしいよ？（ボリボリボリボリ）」

「マジで！？あいつ宇宙人だったの？（パリパリパリ）」

「あいつ呼ばわりなんて無礼ですよ？（ゴクゴクゴク）」

「あー、ポテチうめえ。オレンジジュース最高！」

……あれ？

ヒロインよ、永遠に！（三）

このような事を帝が聞いて、「なんということおじゃ！磨のかぐや姫が！」なんて言ったかどうか定かではありませんが、かぐや姫宅に帝からの使者がきました。

「一体何があつたんですか！？」

「儂の、儂のかぐや姫があゝゝゝ……」

使者は、お爺さんに詳しい話を聞こうとしましたが、泣き止まず、話になりません。

泣いて、喚いて、嘆いて、腰は曲がり、髪は白くなり、目もただれ、とても今年50歳を迎える人には見えません。

……ん？ちよつと待つてください。確か、お爺さんはかぐや姫に言い寄る五人の貴公子たちの件の時に「儂はもう70歳を越えた。とつくに定年してる歳だし、竹取るのもきついし。」なんて言つてましたよね？

実は70ではなかったんです。全然定年しているような歳では無い筈です。そう、あれはかぐや姫を嫁に出すの為の嘘だったのです。

「私はこんなに年取ってるんだから早く嫁に行け」と急かす為のものだったんですね！。早いとこ玉の輿にさせたかっただけでしょ

うが。
「はあ、いきなり自分の娘が居なくなるなんてさぞお辛いでしょうね。」

そんな事は露知らず。使者は、そう言うとお爺さんの肩をポンと叩きました。

「かぐや姫を帰したくはないでしょう?」

「は、はい。かぐや姫は……ぐすつ、今月の十五日に月から迎えが来るとか申しております。儂がかぐや姫を失うと悲しいように、帝様もきつと悲しいおはずですじゃ。ですから、その日に合わせてかぐや姫の身边に警護をつけて欲しいのじゃ。そして月の都の者とやらをとっつかまえるのじゃ!!」

何だかお爺さん、急に元気になってしまいました。

帝の力を借りて、かぐや姫を月へは帰さないように何とかしようと意気込んでいます。

一方、これに対する帝様のお返事と言うと……

「あの拳、でへでへ……／＼／＼おほん、ではなくて一目惚れした磨でさえ帰したくないでおじゃ。なにお爺さんはどんなに辛い思いをしてるでおじゃか、想像もつかないでおじゃよ。ええい、者ども出合えい!!至急かぐや姫宅の警護に当たるのじゃ!今すぐおじゃ!」

「帝様、大変申し上げにくいのですが　十五日まではあと何日かありますよ?」

こんな具合で、当日帝はかぐや姫宅に沢山の兵を派遣しました。

中将鷹野のおおくと云う人を筆頭に、約2千人もの人が警備に当たりました。当然、この人たちの給金は、民から巻き上げた年貢で出るので、たかが女一人のためにこれだけの兵を動かしたと民が聞けば、帝といえどもただてはすまないでしょう。

でも、そんな事なんてこれっぽっちも考えない帝様（むしろ袋叩きになっても喜ぶかもしれません）は、ちゃっっちゃと兵の配置を決め

ました。

まず家の周りに千人、屋根の上に千人……誰でも考え付くような配置ですね。

しかし、ここで良く考えてみてください。「千人乗ってもだいじょーぶ！」なんていう家なのですから、その壮大さが良く分かるでしょう。とにかく、すつつつつつこい屋敷なんです。

家の中の警護はというと、元々使用人の数も多かったので、その人たちを隙間無く敷き詰め、警護に当たらせました。当然のことながら警護の者は皆武器を持っています。

かぐや姫宅は、城砦と化し、これから一戦交えるかのような雰囲気です。

さて、肝心のかぐや姫は何処にいるかと言いますと、お婆さんに抱きかかえられ、周囲を厚い壁で囲われた部屋にあります。戸には当然の如く、錠前がおろしてあります。その前に控えるのはお爺さん……って、最後の守りがお爺さんなのは、ちょっと危ない気もしますが、お爺さんの言う事には、

「かつかつか。これほどの守り、天人にもまける気がせぬわー！」

だそうです。

更にお爺さんは、屋根の上に居る人たちにも一声掛けました。

「おーい、ちょっと聞いてくれんかー。何か少しでも空を横切るものがあれば構わず射殺してくれーい！」

「はい、分かりましたー！蝙蝠一匹だって見逃しませんよ？もし蝙蝠が来たら射殺して、見せしめにその辺に吊るしておこうと思います。」

鳥や、蝙蝠たちにとっては迷惑な話です。

かぐや姫のせいで、人間界だけではなく、動物界にも害が出ようとしています。

まあ、こんな嚴重な警護になったのは、お爺さんの計らいなので、一概にかぐや姫が悪いとは言えませんがね。

動物達の事なんて、これっぽっちも考えず、お爺さんは「これは頼もしい」と頷いていました。

ヒロインよ、永遠に！（四）

帝の派遣した兵や、自分のお付の者達が慌しく警護に当たり、お爺さんが「これは頼もしい」なんて頷いている様子を見て、かぐや姫は深く溜息をつきました。

「私を、こんな所に閉じ込めてー戦う準備したってー、マジ無意味だしー。矢とか絶対当たらないし。錠なんてあの人たちの前だとしてもないしー。今みたいに勇敢な気持ち持つ人も居ないと思うんだけどなー。」

自分の事で周りが一生懸命なっているというのに、かぐや姫の言い方はまるで他人事のようです。

これを聞いて、お爺さんが言う事には

「儂の金の生る木を……じゃなくて、儂の大事な娘を連れ去ろうなんという不届き者は、この儂の長い爪で天から引きずり下ろし……いや、どうせなら目玉を抉り、髪を引っ張り引きずり下ろし、そいつの尻を引っ張り出して、皆の前に晒して恥を掻かせてやる！」

と、大層ご立腹な様子です。

でも、よく考えると言っていることが可笑しいです。ご立腹の様子は最初の言葉で十分に伝わるので、そこで止めておけばいいものを、後半は実に子供っぽいことを言っています。

それを聞いたかぐや姫は、顔を真っ赤にして

「は、恥ずかしい事言っなよ！外に丸聞こえだっつーの。マジみっともないし。まあ、でもそれだけ私のこと大切にしてくれたのに、どうしても別れるなんてぶっちゃけ私も辛いんだよねー。」

「ならぬ、行かせぬぞ！儂の命に変えてもお前を守ってやる！」

「気持ち嬉しいんだけどさー。いやあ、実はさ、じじいたちに何も恩返し出来て無いじゃん？そんな状態で月に帰るの私も心苦しいしー、だから縁側に出てもう一年だけでもこっちに居られるように、お星様というお月様をお願いしたんだけど、あいつら物分り悪くて頭カッチンカッチンだしー。月の都の人って、見かけ綺麗で老いる事もないんだよねー。羨ましいって思うでしょ？とんでもない、あいつら感情無いわけ。そんな奴らのところに私も帰りたくないしねー。老後の面倒みてやりたいとこなんだけどさ。」

まあ、見かけは綺麗で中が何とかだっていうのはかぐや姫を見ていれば想像がつきます。

けれど、そんな中でもこちらに居る事で感情が芽生えたみたいです。悪びれています、本当は優しいのかもしれない。これを聞いてお爺さんは、

「寂しい事を言うんじゃない。どんな人が来ようと儂が守るんじゃない！」

と、天の使者を忌々しいと思っているようです。

ヒロインよ、永遠に！（五）

くだらない事をしているうちに、宵も過ぎて、午前零時を知らせる鐘が鳴りました。え？硝子の靴？それはまた別の話です。

と、その時！！

家の周りが急に昼間以上の明るさになりました。人の毛穴まで見えるほです。想像しただけでどれほど気持ち悪いか……いえ、どれほどの明るさかお分かりいただけるでしょう。

そして、空から雲に乗った人が降りてきました。その人たちは、地上から2mくらいの高さのところに整列しました。

「番号ー！」

「いち！」

「に！」

「さんしよんごろくななはちきゅう……」

「こら、一人で言うのではない。」

こんな馬鹿なやりとりをしながらも皆真顔です。かぐや姫が以前「あいつら頭固いし、感情ない」と言っていたのが頷ける光景です。これだけ美男美女が居ると言うのに、笑うことも無く、怒る事も無く、皆張り付いたような真顔の表情なのです。まるで仮面を被っているかのようでした。

この様子を見て、警護に当たっていた人は皆、物の怪に襲われたような気持ちがして、戦う気力をなくしてしまいました。殆んど

人が手や足に力が入らなくなり、ぐったりとしてしまい、とても武器を持って戦おうなんていう雰囲気ではなくなっていました。かぐや姫が言っていたのはこういうことだったのですね。

さて、人を見下すかのように空中に立っている人たちは、とても素晴らしい衣装を纏っていました。この世の人とは思えません……あ、この世の人ではありませんね、何て言っても月の都の人ですから。

その人たちは空飛ぶ車も伴っていました。円形の傘が付いているとか、色々と説明が面倒なので、ここでは円形の空飛ぶ円盤とでもしておきましょう。こういう細かな設定は気にしたら負けです。それに月の都の人なんて、言い方変えれば宇宙人なんですから、こんな感じで良いと思います。うん。

その円盤の中にいた宇宙人……いえ、月の都の王と思われる人が家に向かって

「造曆よ、出て来い！」

と、威厳たつぷりの声で言いました。初めて会ったはずなのに、作者さえ忘れかけていたお爺さんの本名を知っているなんて驚きですね。

これを聞いて、お爺さんはふらふらと外へ行き、王らしき人の前でひれ伏してしまいました。今まで威勢は微塵も感じられません。

この様子を見て、王らしき……しつこいので王にしましょう。王が言う事には、

「汝は、心が幼くてちっぽけでどうしようもないな。昔は細々と、地道にお金を稼ぎ正しい生活を送っていたから、少しでもお前の助けになればと、少しの間姫を預けた。お前は、見違えるような金持

ちになり、十分に良い生活を送っておる。それなのにまだ、姫を手元に置き、富を築こうとはなんたることだ！姫はこちらの都で罪を犯した罪人、その罪を贖う期間が過ぎたので迎えに来たのだ！それを引きとめようとは、叶わぬこと。早く姫をお出しせよ！！」

確かに、今のお爺さんは富を築き裕福な生活を送っています。

王が言うように「まだまだ富を築くのじゃー！」なんていう願望は、このお爺さんの事ですから全く無いとは言えないでしょう。しかし、かぐや姫を帰したくないというのはそれだけが理由ではないはずで、誰が好き好んで実の子と同じように育てた娘を手放しましょうか？

お爺さんが、答えて言うことには、

「かぐや姫から恩恵を受け……いや、養うこと二十何年になりました。ただの一度も儂のかぐや姫で富を築こうなんて考えたことございません。それに、今『少しの間』とおっしゃいましたよね。私たちにとってかぐや姫との時間は長い時間です。きっと別のところに居るかぐや姫のことでしょう。此処にいるかぐや姫は閉じ込……じやなくて、病気、そう病気、しかも重病で寝ております。だから行けないでしょう。」

所々に本音やら、苦しい嘘やら　もう、ここまでくると出鱈目を言っているのがバレバレです。

こんなダメダメなお爺さんの言い訳なんか、さらつと聞き流し、空飛ぶ円盤を寄せ、月の都の王は、お爺さんとは正反対の威厳たっぷりな声で、こう言いました。

「さあさ、姫よ！こんな薄汚れ、欲にまみれた人間界にもう居る必要はありません！出てらっしゃい！」

すると、錠を下ろし、かぐや姫を閉じ込めていた筈の部屋の戸がぱつと開いてしまいました。

下ろしてあった格子なども、人が手を触れてないのに開いてしまいます。

さすが、宇宙人。やる違います。

お婆さんが抱きかかえていた、かぐや姫も外へ出て行ってしまいました。

お婆さんは、空を見上げた大粒の涙を流すばかりでした。

さて、月の都の王は「欲にまみれた」なんて言ってますが、皆が皆お爺さんみたく強欲だって目で見られるのも、正直迷惑極まりないんですけどねー。

ヒロインよ、永遠に！（六）

お爺さんが、大粒の涙を流し泣き伏せつているところに、かぐや姫は駆け寄りました。

「じ……お爺様、泣かないで下さいまし。私だって別に行きたくないのに行くんだしー」です。せめて見送るくらい見送って欲しいのです。」

『！？』

上の括弧は皆の驚きを表しています。

なんせ、あのかぐや姫が敬語を使ったのですから、そりゃあもう驚きますとも。

きつと普段見たく「じじい、ばばあ」とか、「だしー」なんていう言葉遣いをしていると、月の都の人に「こいつ、全然反省して無い！もとは罪人なのに！」とか思われるのが嫌だったんでしよう。けれども、上手く敬語が使えてません。馴れない事をする、普段の癖がぼろつと出てしまうものです。皆さんも面接などの時は気を付けましょう。

皆は驚いていても、お爺さんはそんなこと気にしちやいけません。我が子が天に行ってしまうのですからそれどころでは無いのです。よう。かぐや姫を引きとめようと必死です。

「どうして儂を置いて行ってしまうのじゃ。儂はもつとかぐや姫の傍に居たい！もっと家を繁栄させて、もっとお前に色々なことをしてやりたい！そんな高貴な人たちならば仲間入りしたいから一緒に連れて行ってくれはしないか！」

もう「お爺さん」俗世の穢れ」みたいな方程式が見えます。我が子が大事なのか、それとも富が大事なのか。天秤にかけたら富のほうが重いような気がします。月の都の人たちも、お爺さんのこういうところが嫌なのでしょう。

「じゃあー、手紙を書き残しましょうです。私の事がー、恋しくなったら読むようにー…なのです。」

「金ー！姫ー！」と泣き喚くお爺さんに、かぐや姫はしどろもどろの敬語でそう伝えたと、筆を執りました。

「私がい、月の生まれじゃなかったら悲しませることもなかったんだろうけどねー、ごめん…。(ノ、)。いつまでも一緒に居たいけど、どう考えても無理っぽいし(、。、。、)私も帰りたくは無いんだけど。：(；、；)。じゃあさ、この手紙と着物を置いてくからーそれで時々私のこと思い出してくんない？ - (、。、) 私も悲しくて、月に帰っても月から落ちそうな気分だし(、A、)。じゃあね、今まで本当に有難う、マジ感謝ー¥(ハ、ハ、)。」

…… 本当に悲しいんだか何だか分からないほど、顔文字がふんだんに使ってある手紙です。

しかも、手紙には敬語の欠片も見えません。こんな文章を月の王が見たらきつと「やっぱ反省してねーんじゃないか。」「なんて思うことでしょうか。

こんな手紙でも、お爺さん達にとっては、かぐや姫から貰う最初で最後の手紙です。喜んでいいのやら、悲しめばよいのやら、考えれば考えるほど涙が止まることはありません。

王以外の宇宙人と言う名の天人の中に、何やらに箱を持っている

人がいます。

一つの箱には天の羽衣、もう一つの箱には壺に入った不老不死の薬が入っています。

「壺の薬をお舐め下さい。こんな穢れた者達と一緒に穢れた世界で穢れた食事を摂っていたのですから、さぞかし気分がお悪いでしょう。穢れてるから。」

天人の一人がいやに「穢れ」を強調してそう言いました。聞いている方はイラっとします。

かぐや姫は、それを一口舐めると、残りを脱いだ着物に包もうとしました。きつと形見の品にとでも思ったんでしょう。

けれど天人が包ませませんでした。それも当然です。不死の薬なんてやたらに一回っては大変な事になりかねません。

もう一人の天人が、かぐや姫に天の羽衣を取り出し着せようと思いました。すると…

「待つて」

とかぐや姫が言うので、天人の動きはピタリと止まりました。

「その衣を着るとー、地上の人とは違う風になっちゃうしー……なるそうです、はい。その前に一言言っておきたいことが。」

と言うと、かぐや姫はまたもや筆を執りました。

迎えに来た宇宙人ご一行はどこか苛々しているようです。

ヒロインよ、永遠に！（七）

またもや、さらさらと手紙を書き始めたかぐや姫を見て、天人は

「遅い！」

と言いました。内心「いつまで待たせるんだよ、待ってる方の身にもなれよ。」なんて思っているようですが、元々神経の図太いかぐや姫はそんなことお構いなしです。

「五月蠅い人たちー、マジウザイー…っ、うつとおしいー。本当に人の気持ちの分からない人たちでございますわ、ほほほほほ。」

と、言いながら手紙を書き続けます。

地が出ているのを必死に誤魔化しているようですが、天人たちは地が出ていることすら気付いていません。やっぱり鈍い人たちの集まりなんでしょうか？

さて、かぐや姫は先程お爺さんに手紙を書いていました。ってことは一体今書いている手紙は誰宛なんでしょうか？

その答えは意外や意外、文通相手のあの人でした。

『こんなに沢山の兵動かして、私を引き止めようなんてー、お前にしてはいいことやるじゃん。まあ、それも甲斐なく私は強制連行されちゃうんだけどねー。うん、笑えないよね…あはははは。私が今まで帝に仕えなかったのはこういう面倒な身だからだったんだよねー。じゃあね、確かにアンタは変態だったけど、私、嫌いじゃ無かったよ。私のこと悪く思わないでね？』

「兵を動かした」「変態」この言葉から連想できるのは、そう帝様

です。

らしくもなく、乙女チックな文章を書いて、更に歌を添えました。

『今はとて天の羽衣着るをりぞ君をあはれと思ひいでける（訳*私馬鹿だね、アンタ以上に。天の羽衣着て記憶が無くなるこの瞬間に、アンタの事好きだって気付くなんて。）』

どうやら帝の歪んだ恋は叶っていたようです。

しかし、かぐや姫の記憶はもうすぐになくなってしまいます。もつと早くに結ばれてしまっていたらもつと苦しい思いをしていたかもしれない。

でも、'苦しい' 思いとか、痛そうなもの、帝って好きそうですよね？何はともあれ、かぐや姫は手紙と歌に不死の薬を添えて、はい！お値段1万5千円！送料はジャパ（以下略）……ではなくて、頭の中將がたまたま近くに居たので、その人に帝に渡すように託しました。あれだけ「不死の薬渡しちゃ駄目ー！」なんて態度に示していた天人があっさりオーケーしたのが不思議ではありますが、その辺は触れてはいけないようです。

頭の中將が品を受け取ったのを確認すると、天人たちはかぐや姫にすぐ天の羽衣を着せてしまいました。

さっきまで、お爺さんと離れたくないと思っていた感情も完璧に消え失せ、かぐや姫は他の天人と同様、心がなくなっていました。そして、さっさと空飛ぶ円盤に乗り込み、月へと帰ってしまいました。

あっさりですねえ。

おやつは300円分！（完）

その後、お爺さんとお婆さんは、血の涙を流して悲しみました。大事な娘が去ってしまい、おまけに財産は減る一方、これじゃ泣きたくもありませんが、泣いてどうにかなる事じゃないのですから、仕方ありません。

かぐや姫の書き残した手紙を、お付の者が何度も読み聞かせるのですが、

「もう命など惜しくは無い。富も名誉も今となっては何の意味も無い。あの親不孝者の いや、大切なかぐや姫よ…そなたが居ないのに、惜しむものなどあるだろうか。もう、何も意味がないのじゃ。」

そう言つて二人とも起き上がろうともせず、薬も飲まずに病の床にふせっています。

あんなに威勢が良くて、金のことを四六時中考えていたお爺さんとお婆さんも、こうなってしまうと可哀想です。

この世にはお金には換えられないものがあるという大切な教訓になる光景ですね。

中将鷹野のおおくには、「俺達意味無いじゃん」とかばやきながら、兵を引き連れ帰って行きました。

その後、帝に出来事を事細かに報告しました。

「だーかーらー、引き止めようと皆精一杯頑張ったんですが、この世のものではない人たちに全く攻撃が通用しなくて、かぐや姫は強制連行されちゃったんです。」

「う、嘘でおじゃ！ 曆は認めないでおじゃよ！」

確かに、中將は「攻撃したけど通用しなかった」と言い張っているが、実際は手も足も出ず、その場に倒れ込んでいただけでした。

「ああ、そうそう。かぐや姫から手紙と怪しい薬を預かりました。何でも不老不死の薬だそうで。」

「寄越すおじゃ！」

乱暴に中將から品物を受け取り、早速帝は手紙を読み始めました。

「こ、これは……」

帝はその手紙に大きく心を動かされ、その日から何も食べず、音楽を奏でたりという事もやめ、お爺さんとお婆さんのように無気力になってしまいました。

そりやそうです。もう二度と会えなくなってから、両思いだと分かるなんてそんな悲しいことがあるでしょうか。

何日か経ったある日、帝は大臣などの位の高い家臣たちを呼び集めました。

「ここから一番近くて日本で一番高い山はあるでおじゃか？」

「一番近くて一番日本で高い山なんて無理なことおっしゃらないで下さいよ。一番近くでないところで良いのなら駿河にある山が、何でも日本一高いらしいですよ？」

帝はこれを聞いて「そうか、天に一番近いのでおじやな。」と一人納得したように頷き、歌を詠みました。

『逢ふことも涙に浮かぶわが身には死なぬ薬もなにかはせむ（訳*もう二度とあの痛みを味わえないと思うと涙がとまらないでおじや。磨の事を叱ってくれるそなたが欲しかったのに、不死の薬なんて磨にとっては価値の無い物でおじや。）』

その歌と、かぐや姫がくれた手紙、不死の薬を使者の調のいわさかと言う人に渡しました。

「これを持って駿河の山へ行くおじや。ちょ、ちょっと待つおじや。人の話は最後まで聞いてから行くおじやよ！そう、其処にもう一度座るおじや。おほん、これをその山の頂上で燃やしてきてほしいおじやよ。」

「えー、面倒ですよ。なんでそんな物の為に頂上まで？麓じゃ駄目なんですか？」

「麓じゃ意味がないおじや！それと大切なものなんだから、そんな物とか言うてないおじや！」

調のいわさかは、「そんな大切なものなら燃やすなよ。てか、自分で行きやがれ。」と内心文句を言いつつ、それらを持って、共を引き連れ、駿河の山に向かいました。

おやつは300円分……持って行ったか定かではありませんが、調のいわさかは帝に言われたとおり、その山の頂上で不死の薬とかぐや姫からの手紙を燃やしました。
そんなわけで「富士の山」は「不死の山」から来ているそうです。

その煙は未だに雲の中に立ち昇っているそうですよ。
めでたし、めでたし……なのか？

おやつは300円分！（完）（後書き）

いかがでしたでしょうか？竹取物語をギャグ小説にして見ましたけれど、原作のイメージを大きく傷つけてしまったことにはお詫び申し上げます。

では、感想待ってます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7938d/>

偽・竹取物語

2010年10月11日21時39分発行